

國は曾て滅亡したることなしと、今でも和蘭人が誇つて居る、シテ見ると此慶應義塾は、日本の洋學の爲めには和蘭の出島と同様、世の中に如何なる騒動があつても、變亂があつても未だ曾て洋學の命脈を斷やしたことはないぞよ、慶應義塾は一日も休業したことはない、此塾のあらん限り、大日本は世界の文明國である、世間に頓着するなど申して大勢の少年を勵ましたことがあります。

死にともな (本多忠勝)

本多平八郎忠勝の臨終に、その子忠政、忠朝兩人聲を揃へて

「御遺言はございませぬか？」

忠勝、唯一つ言ひ遺し度いことがあると云ふ。何事かと耳を時てると

「死にたくないものだ。」

かう言つたきりである。世にも優れた武將の遺言として、餘りに意外なので、兩人は

「何と仰せられます、有象は始めあれば終りあるが世の慣ひでございます。」
と、申上げた。忠勝は筆を取り寄せて

死にともな死にともなあら死にともな

御恩を受けし君を思へは

と認めて、兩人に示し、やがて眠るが如く往生を遂げた。

青柳 (花園左大臣家の侍)

花園左大臣家に、始めて参つた侍が、名簿のはしがきに、能は歌よみと書いた。秋の初め大臣南殿に出で、促織の鳴くのを愛で、居られたが、やがて日が暮れたので、入浴したが、折悪しく誰も居なかつたので、かの侍が罷り出た。汝は歌を詠むさうぢやが、此の促織を聴いて一首どうぢやと仰せられた。侍かしくまりて「青柳の」と詠みあけると、候ひける女房達、季節に合はずと思つたらしく、互に顔を見交はして笑うた。大臣、物を聞き果てずして笑ふやうや

あるとて、疾くその後をと仰せられた。やがて侍

青柳のみどりの絲をくりおきて

夏へて秋ははたおりぞなく

と詠んだので、大臣深く感じ給ひ、萩おりたる御直垂を推し出して賜はつた。

硯も筆もすみとなり (北枝)

北枝は加賀國小松町の人、兄と共に蕉門に入り、兄は牧童と稱した。元祿年間金澤の出火に、北枝の家も焼け、日々見舞客が多かつたが

焼けにけりされども花は散登し

と、口吟んで自若としてゐた。後再び火災に罹りし際、從吾先づ訪ひ來りて

諸共に硯も筆もすみとなる

烟の中に一句什麼生

北枝之れに答へて

諸共に硯も筆もすみとなり

其言の葉を書く物ぞなき

互に相許す (草雲、曉齋)

田崎草雲が足利に退いて十六年。中央の畫壇にはまた草雲を口にする者もなくなつた頃、淺草井生村樓の雅會に、當時の名流數十名參會した際、無落款の駿馬を持參した者があつた。道勁の筆致、淋漓の墨痕、氣韻の俊れて高い逸品であつた。が、誰あつて筆者を知る者がなかつた。そこへ猩々曉齋で知られた河鍋曉齋が來合せて、

「今の世にこれだけの畫を描き得る者は、俺でなければ足利の草雲の外はない。」

と言つた。裏を檢めると、果して草雲の匿署があつた。相距ること二十餘里、相別れて十餘年風の便りに唯其健在を知り合ふのみであつたが、斯くと聞いて草雲も「俺の描いた千里の駒が

曉齋の伯樂に會つて、素性を知られたか」と言つて笑つた。

草雲と曉齋とは、兄弟同様の親しい仲で、曉齋は常に草雲に兄事してゐた。

曉齋は岸田吟香等とも談合つて、切りに草雲に土京を勸告したが、草雲は

「東京には曉齋さへ居れば澤山だ、今更俺が出るにも及ぶまいよ」と、言つて、一生足利を出なかつた。

合點ぢや (涼菟)

涼菟は初め伊勢山田の祠官で、姓は岩田通稱安次郎、蕉門に遊んで神風館、團友齋等と號した。

或る年近き邊りに花を賞せんとて、草履穿きのまゝふらり出かけた。其日の中には歸つて來るだらうと思つて居たが幾日経つても歸らない。どうしたことかと思つて居ると、近所の花から思ひ立つて、洛の東山へ赴き、それから播州須磨等の櫻を見、つひうか／＼と長崎まで遊び

に行つて來たといつて、久しく經つてから歸つて來た。

老後病んで危篤に及んだ時、門人の請ふに任せて

合點ぢや其あかつきの子規

柿の樹を伐る (高橋東岡妻)

天文學者高橋東岡は、夜毎の柿盗人に思考を亂されて夢からず閉口した。門を出で、叱かれは忽ち逃げ去るが、いつの間にかまたやつて來るのであつた。

一日東岡師の家から歸つて見ると、意外にも其柿の樹は伐り付されてあつた。東岡は驚いて妻を喚んだ。

「柿の樹が伐り付されて居る、どうした、誰が伐つたのぢや。」

氣ぜはしく問ふと、兩手をついて良人の前に俯伏した妻は、徐ろに首を擧げて

「柿の樹を伐つたのは妾でございます。」

と、面に決心の色を現はして、徐ろに告白した。家計のたしにもなる大事な柿の樹ではあるが、良人の學業の妨げとなるのを見ては、そんなことは何でもなかつた。夜毎の柿盗人に、良人の思考の亂され勝ちなのを憂へた妻は、良人の留守を幸ひに人を備うて其柿の樹を伐らしめたのであつた。流石に東岡は凡人ではなかつた。

「オ、さうぢやつたのか、わしが悪かつた。大切の學問の妨げになる柿の樹ぢや、少しも惜しうはない、よくして呉れた。」

爾來東岡は一層天文曆數の學に心を潜め、遂に幕府に召されて曆官となつた。

東岡三十二歳の時、一日女關を訪づれた老書生があつた。これが後年天下に其名を轟かした伊能忠敬である。忠敬其時齡己に五十歳、其師に長ずること實に十八歳であつた。

無用人 (寺門靜軒)

寺門靜軒は江戸の人「江戸繁昌記」の著、累を爲して江戸を逐はれ、復び儒を以て世に立つこ

とが出来ないので、髪を剃り形を毀ち、風流自ら命じて無用人と稱した。

月の客 (向井去來)

向井去來は肥前の産、俗名を平次郎といふ、兄に随つて洛陽に住し、蕉門に入つて去來と稱し、落柿舎と號した。

落柿舎壁書に曰く

- 一、我家の俳諧に遊ぶべし世の理窟をいふべからず
 - 一、朝夕かたく精進を思ふべし魚鳥を忌むにはあらず
 - 一、速に灰吹をすつべし烟草を嫌ふにはあらず
 - 一、隣の居膳を待つべし火の用心にはあらず
- (此の隣の居膳といふのは、屋敷守の與平といふ者が、朝夕の食事を落柿舎へ送つたからである。)

或る年の仲秋に

岩端や爰にもひとり月の客

と吟じて、先師の耳を驚かし、月賞翫の第一古今の秀逸と稱せられた。

傍若無人 (夢の市郎兵衛)

寛永 正保の間俠名を四方に轟かした夢の市郎兵衛は、江戸浮世小路に住んでゐた。

曾て京都に天覽角力の催しのあつた時、市郎兵衛の義兄弟明石志賀之助も召されて出る事になつた。市郎兵衛は其後見として俱に京に上つた。

志賀之助の對手は、京都で鳴らした仁王仁太夫といふ關取であつた。愈々東西の兩大關が顔を合せることに決つた日、市郎兵衛は志賀之助に對つて斯う言つた。

「晴れの勝負だ、萬一ひけを取つたら、お前も江戸には歸れまい、俺も復び江戸の土は踏まぬつもりだ。」

志賀之助は死を決して土俵に上つた。そして力戰奮闘、華々しい勝を制した。斯くして志賀之助は日下開山横綱免許を得たのである。仁王の徒は深く之れを恨みとし、志賀之助を欺し討ちにして恥辱を雪がうと企てた。が、市郎兵衛は早くも之れを看破した。

相撲が濟むや否や、志賀之助は市郎兵衛の差圖で、密かに江戸へ歸つてしまつた。併し市郎兵衛は敵の計略の裏を搔いた斗りで、満足しては居なかつた。志賀之助に代つて、自ら敵に對する覺悟であつた。先づ黒繩子の羽織を造り、これに「明石志賀之助」の五字を大書して錦糸で刺繡させた、それを着て熊谷笠を目深く冠り、三尺に餘る脇差を門に佩びた。そして白晝只一人悠々として京都を發足に及んだ。有繫に仁王の徒も、此傍若無人の有様に氣を吞まれて手を下さうといふ者はなかつた。

市郎兵衛は後ちに浮世を捨て、佛門に入り、祐生と號して相模の國田村に隱退したが、實兄放駒四郎兵衛の死を聞いて一層此世が厭はしくなり、終に自ら絶食して死んだと傳へられて居る。

行路難 (竹村悔齋)

竹村悔齋は、安積良齋と俱に、本多氏の邸を出た。晩秋の月は鏡の如く澄み渡つてゐた。二人は多少酔を帯びてゐた。同じ林述齋門下の菊池某が、近く長崎に遊ぶといふので、別宴を開いての歸りであつた。二人は手を携へて此良夜を語りつゝ、俎橋に至つて袂を分つた。悔齋は何か少し昂奮して居つた。ふと見ると以前仕へてゐたことのある三河舉母藩の江戸家老某が向ふからやつて來た。悔齋は此家老の非行を憤り、彈劾書を藩侯に捧けて用ゐられなかつた爲めに、職を辭したのであつた。悔齋はむか々したが、知らぬ振りをして道傍に小便をしてゐた。それを目敏くも其家老が見つけた。無言つて行つてしまへば無事だつたのであるが家老にして見ると、豫て悔齋の所爲を小癩だと思つて居たのであらう。路傍に小便するのは何者だツ」と叱咤したから堪らない、悔齋の堪忍袋は忽ちにして破れた。「己れ國賊」と叫ぶや否や、抜く手も見せず家老に斬りかけた。家老も抜き合せようとしたが、二の太刀は早くも家老

の命を斷つてしまつた。仲間共も悔齋の勢ひに恐れて手を出す者はなかつた。

悔齋は其足で直ちに麴町の友人を訪ひ、顛末を委しく告げた上、善後策を問つた。友人は之れに三つの策を教へた。第一は官に訴へて罪を待つ事、第二は家に歸つて自刃する事、第三は何處へか逃げ延びる事であつた。悔齋は第二の策を實行することに決心した。そして友人等と痛飲し、從容紙を伸べて蘭と竹とを描き、句を題して家に歸ると直ちに立派な自殺を遂げた。時に年三十六歳であつた。

悔齋は三河の人であるが、夙く江戸に上つて佐藤一齋の門に入り、儕輩の間に嶄然として頭角を現はした。後ち更に林述齋の門に入つて益々其文才を磨いた。述齋も深く其の俊才を愛し、門生を集めて詩文の會を開く毎に、常に悔齋をして牛耳を執らしめたと云ふ。

前に述べた江戸家老某を彈劾して容れられなかつた際、「行路難」の長詩一篇を作つたが、忠憤の志楮表に躍動して居るといふ。

推 敲 (佐藤一齋)

佐藤一齋は、文を作るに、法を八家に探り、就中韓歐を尙んだ。一文を作る毎に或は座し、或は臥し、其間胸中豫め全體の趣向を立て、しまふ。それから筆を執れば、千言立ろに成るの概があつたが、決して夫れで甘んじない、修正又修正を重ねること凡そ旬日、始めて脱稿するのが常であつた。而して其平生讀過の書冊は、朱綠紛々句法辭法を標出して已まなかつたさうだ。

簞 虫 (俳諧寺一茶)

絲瓜蔓切つてしまへばもとの水

離縁狀の代りに、かういふ一句を渡して妻と別れた一茶の懐ろには、混蔵といふ生れて間もない嬰子が居つた。さらでだに足らぬ勝ちな男の手一つに、此子を育て、行くことは到底不可

能であつた。

柏原在赤澁村の百姓富右衛門といふ者の女房が、子を失つて乳の始末に困り、里子を求めて居るといふ話を聞いて、一茶は遙々之れを尋ね行き、乏しい中から多分の手當を仕送つて、之れが養育を頼んだ。ところが、運の悪いことには、之れが世の所謂貰ひ子喰ひであつたので、不幸な一茶の子は、とう／＼營養不良で死んでしまつた。

此の真相を聞知つた時の一茶は、全身を慄はして無念がつた。富右衛門夫婦の人面獸心を罵つては

もの言はぬ幼の口を赤澁の

水の貴とは鬼も知らじな

と言ひ、幼兒の苦患を思ひやつては

乳戀しち、戀しとや簞蟲の

泣き明かしけむ泣き暮らしけむ

と嘆いた。

子を取られた鴉の親が、終夜屋根の上で啼いて居るのが可哀想だとて

子を思ふ闇やかはゆい／＼と

聲をからすの鳴き明すらむ

とも咏んだ。

鹿の親笹吹く風に戻りけり

といふ句も、斯うした一茶の境遇から出たものとして味はつてこそ、本統の味ひが判るのであ

夜の雨 (明石城了)

明石城了は足利氏の支族で、後醍醐帝の御代に総檢校に補せられた人である。性和歌を好み曾て「旅宿聞雨」の一詠天聽に達し、後雨夜の號を後小松天皇より受け又紫衣を賜はつた。之れ

が盲人紫衣を賜ふの嚆矢である。その聞雨の歌に曰

夜の雨の窓を打つにも碎くれば

こゝろは脆きものにぞありける

悪戯 (吉田兼好)

「徒然草」の著者吉田兼好は、元と後宇多帝北面の士であつたが、後ち薙髮し叡山に上つて僧となつた。頼阿、淨辨、慶運と俱に、和歌の四天王と稱せられた。

兼好が、高師直の爲めに艶書を書いたことは有名な話であるが、或る年の二月十五夜のことであつた。彼は月の良きに乗じて千本の釋迦堂に至り、潜かに堂後に入つて讀經の聲に耳を傾けてゐた。すると一人の美人が忽然として現はれて兼好の側にすり寄つて來た。紅粉の装ひ蘭麝の香り、人の心を咬るに十分であつた。併し兼好は、徐かに起つて他に移つた。すると美人は又後を慕つて、其側に近寄らうとしたので、兼好は、それを避けて其寺を去つてしまつた。

兼好の道心を試みんとて、宮女等相謀つての悪戯であつた。

上手も死ねば尿上手

(森川許六)

森川許六は、江州彦根井伊家の給人、五老井と號した。桃鄰の紹介で芭蕉翁の門に入り、終に正風の體實を得、畫は狩野安信に學んで奥妙を極めた。されば芭蕉も、畫は許六に學び、俳諧は之に教へて吾が弟子とした。爲人敏達にして文事に長じ、即ち六藝に通ずるの故を以て、翁之れに許六の號を與へたといふことである。

許六又常に己れが才を自讃して、他を見ること芻狗の如く、翁の腹中に下駄を穿きて入り得る者は我一人なりと高ぶつてゐた。惜しいことには晩年癩を病んだ爲めに、固く門を閉ぢて人に會はなかつた。適々道を問はんとして尋ねて來る者があつても、屏風を立てきつて直接逢ふことを許さなかつた。或る年生駒萬子來りて面會せんことを求めた。許六大に悦び、初めて屏風を取除かせ、病床に迎へて酒を酌み、清談數刻に涉つた。許六其時既に唇缺け落ちて臭氣

芬々たる狀であつたが、萬子は一尙斟酌なく近く寄りて酒酌み交はし、許六も亦病の爲めには妻子にも忍び隠れてゐたが、此俳友に遇うては露ほども愧づることなく語り合つた。終焉の偈に曰く

一時打破屎糞壺 芬々臭供ニ梵天

下手ばかり死ぬる事ぞと思ひしに

上手も死ねば尿上手なり

草紙洗ひ

(小野小町)

内裏に歌合せのあつた際、小野小町と大伴黒主と組んで「水邊の草」といふ題で詠み競うた。その時小町の詠んだ歌は

蒔かなくに何を種とて浮草の

波のうねく生ひ茂るらむ

といふのであつた。小町がかう口吟むのを、黒主は立聴きして、直ちに之れを萬葉集の草紙に寫し、やがて披露の際、帝に、小町は古歌を窃んだのだと奏した。小町は不審に思ひ、その草紙を申し受けて洗つた所が、小町の窃んだといふ歌ばかりは消えてしまつたので、忽ち其冤罪は霽れたといふ。これは勿論作話で、事實あつた事ではないが、草紙洗小町と言つて、七小町の一に算へられて居る程有名な話である。

難を免る (福地櫻痴)

戊辰の騒動の際、福地櫻痴其主宰せる『江湖新聞』に一篇の論文を掲げて、大に彰義隊に同情を寄せた爲めに薩長軍に捕はれて其陣屋に引かれた。

亂世の常として刑法は唯ニケ條あるばかりであつた。即ち首を刎ねるか、放免するかの二途の外はない。死を決した幕府側の士は、いづれも熾んに大言壯語を吐き、謾罵罵言を極めて、寧ろ斷頭臺上の露と消ゆることを希つた。此等は大抵斬首されてしまつた。が、櫻痴は其間に

在つて些しも騒がず有り合せた硯を取つて咄嗟に十枚許りの陳情書を作り、之れを吟味役に示した。而も其文中には歐洲の實例を澤山引いて、屬吏の眼を驚かした。ところが吟味役は之れを讀んでどう感じたものか、五七人篝火の下に首を鳩めて種々協議した結果「彼奴は味方の方にも役に立つ哩。」など、話し合つて居たが、其の爲め不思議に其難を免れた。時に櫻痴は僅に二十七歳の青年であつた。

ふし柴 (加賀)

待賢門院の女房に、加賀といふ歌よみがあつた。

かねてより思ひしことよふし柴の

こゝろばかりなるなけきせんとは

といふ歌を豫て詠んであつたが、之れを此處發表しては面白くない。同じことでも、さるべき

人に言ひ契つて、忘れられた際などに詠んだならば、屹度集にも選ばれるであらうとて、いろいろ思案をめぐらした末、花園の大臣に言ひ染めたが、やがて其仲の疎くなつた時、右の歌を書いて送つた。果して大臣はいみじく哀れに思召されて、此歌を千載集に入れられた。それ以來「ふし柴の加賀」と言はれるやうになつた。

枯野 (智月尼)

智月尼は江州大津の人で、乙州は其子である。親子共に風雅の道を好んで芭蕉を師とした。或る時乙州が東行の旅立を送るとて

わざとさへ見にゆく旅を不二の雪

嵐蘭を悼みて

鳴出して米こぼしけり稻雀

身の老衰を嘆ちて

わが形も哀れに見ゆる枯野哉

はい左様なら (十返舎一九)

△三月目

夜半にふと目を覺ました十返舎一九は、窓にうつる月影に誘はれ、蚊帳を出でて縁側に立つた。もう宵の酒は悉皆醒めてゐた。雨戸を開けて庭下駄を穿いた儘、そつと外へ出ると、人通りの全く絶えた夜の街はいんとして物音一つ聞えない。あてもなくふら／＼歩いて居るうちに、日本橋まで来てしまつた。橋の上で暫く月を眺めてゐると、急に遊意が動いて來た。いつもの癖で、さうなるともう矢も楯もたまらなかつた。その足で、家へも歸らず京大阪へと遊びに行つてしまつた。それから三ヶ月といふものは音も沙汰もなかつたが、一九の家でも馴れづこになつて、格別心配もしなかつた。

秋風が好い加減身に沁みる頃になつて、一九はひよつこり歸つて來た。そしてロクな挨拶も

なくいつもの書齋に入つてしまつた。一九の書齋は亂雑なことで有名で、書籍や筆硯の取散らかしてあるのはまだしも、お膳もあれば茶碗もある、徳利も盃も雑然として足の踏み場もない中へ、年中敷き通しの夜具があつた。而も此室へは、家人と雖も一切入ることを禁じてあつた。一九が歸つて見ると、室の中は三月前其儘になつてゐた。それはいいが、夜中に出るとき、吊手を一つ外して出た蚊帳がまだ其儘吊るされてあつた。これには流石の一九も少々呆れざるを得なかつたであらう。

△元旦風呂

或年の大晦日に、一九は近處の懇意な家から据風呂を借りて來た。そして元旦早朝セツセと湯を沸かしてゐた。そこへ年賀の客が來ると、強ひて勸めて其客を風呂に入れた。貧乏人の一九だが、變り者だけに元旦の風呂のもてなしとは面白い趣向だと、感心しながら、客が湯を出て見ると、着て來た禮服がそっくり見當らない。主人の一九を呼んだが返事も無い、不思議に思つたが、裸で居る譯にも行かず、すぐ手近な處に脱ぎ棄て、ある一九の普段衣らしいのを着

て、兎も角もその歸るのを待つてゐた。暫らくすると、一九は意氣揚々として外から歸つて來た。客の禮服を無斷借用して、家主を初め近所鄰りへ賀禮に行つて來たのである。風呂を勤めたのはその爲めの計略であつた。客も呆れて笑つて歸つて行くの外なかつた。

△膝栗毛

一九は本名重田貞一、幼名を幾次郎と稱した。一九は即ち幾をもぢつたのである。父鞭助は駿府市尹の屬吏であつた。父の歿後其職を襲いたが、人となり磊落で、殊に酒癖が悪かつたので、人にも容れられず、己れも亦吏務を屑しとしなかつたので、職を弟に譲つて大阪に遊び、淨瑠璃作者となつたのが二十一歳の時である。並木千柳、若竹笛射等との合作で、「木下蔭挾間合戦」を著はしたが、未だ多く知らるゝに至らなかつた。享和二年「道中膝栗毛」を著はしてから、文名俄に擧り、今に至る迄一九の名を知らぬ者がなく、作中の人物、彌次郎兵衛、北八は滑稽家の代表者のやうに思ひ做されて居る。

△辭世

一九が死ぬる時、門人に遺言して、湯灌を禁じ、衣服も平生衣の儘にして、決して之れを更めず、且つ必ず火葬にすべきにとを命じた。門人其言に従うて、火を點すると、星光數道屍體中から迸出したので、怪んで之れを検むれば、豫め花火を懐中して居つたのであつた。

辭世に曰く

此世をばどりやお暇にせん香の

煙とともにはい左様なら

おもひやり (尾張光友)

寛文中、酒井修理太夫忠直、若狭國から參觀するとして尾州の内を通つたが、召し具したる輕卒が、荷をつけた馬方と口論を初め、馬方の慮外重疊だつた爲めに、とう／＼之れを討つて捨てた。修理太夫之れを聞いて、ヒドク其士を惜んだけれども、喧嘩兩成敗は天下の禮法である況んや馬方とは言ひながら尾州侯の國人であつて見れば、其儘には差置かれまい、近所に寺は

ないか、と尋ねて、漸く寺を探し出だし、其處で切腹させた。其事を尾州侯光友へ申上げるとそれは飛んでもないことをした、士と馬方とは一緒にならない、況んや馬方が慮外の上に愚口したとあるからは、之れを成敗するのは當然である。然るに修理太夫が、士を馬方の相手に出したのは、我に對して遠慮する處ある爲めであらう。それにしても切腹ならば其旅陣でさすべきなのに、寺を尋ねさせたのは深い考のあることで、どんなにか其士を惜しく思つたことであらう。それをまた住持の僧か何故に命乞をしなかつたのだらう。油斷至極無慈悲の出家である、速に追放するがよい、と下知された。

朝鮮へは聞えまい (柴野栗山)

柴野栗山は讃岐の人、東都の學界に三助の一人として知られた碩學である。或る時、朝鮮聘禮の事があつて、幕府は議を昌平齋に下し、諸儒をして之れを評議せしめた。栗山は磊落な人で、議論が高調に達すると、不知不識四筵を驚かすばかりの大聲を發した。林祭酒が、先生少

しお聲を低めて頂き度、と宥めると、栗山眞面目な顔をして、なるほど予の聲は高いけれどもまさか朝鮮迄は聞えまい、と濟して言つたので一座の人々思はず噴飯した。

盟から盟に (俳諧寺一茶)

娘を失つた文政二年の冬、一茶は中風に罹つて流遊の望みも絶えてしまつた。で、その年の師走二十九日に、安心決定の詞を造りて

兎も角もあなた任せの年の暮

と吟じた。併し壽命はまだ残つて新らしい春を迎へた。元日の句は

今年から丸儲けぞよ娑婆の空

以來、蘇生坊と稱した。

亡くなつたのは文政十年だが、愈々再起の望みが絶えると、見舞に集つた門人を枕許へ呼寄せて

「俺が死んだら必ず正風の句を學んで、苟にも俺のやうな眞似はするんぢやないぞ。」と戒めた。辭世は

盟から盟にうつるちんぶんかん

先づ酒を飲め (中井履軒)

富豪鴻池、力士谷風と共に、天下第一流の三幅通なりと自稱せし中井竹山の弟履軒は、新に入門する書生に對して、先づ酒を嗜むかどうかを問うた。そして曰く、何よりも先づ酒を飲むがい、文章を學ぶのはそれからのことだ、酒を飲まずに文章を學ぶと屹度氣鬱病に罹るか、といふのが常であつた。

絶交 (北齋、馬琴)

葛飾北齋は、初め瀧澤馬琴と親交があつた。ところが、馬琴が「南柯後記」を著はして、挿畫

を北齋に請うた際、其圖は、刀屋道次の私闘を描くので、道次が口に草履を穿へ、裾を端折つてゐる圖柄であつた。北齋をこれを見て笑つて曰く、こんな穢い草履なぞを、誰が口にするものがある。若し僕の言ふことが偽りと思ふならば、君が先づ脚へて見給へと言つたので、馬琴は大に怒り、さんざ二人で喧嘩した揚句絶交してしまつた。

雨乞 (小野小町)

小野小町雨乞の歌として人口に膾炙してゐるのは、

ことほりや日の本なれば早りもせめ

さりとは又あめが下とは

といふのである、無論之れは後人の偽作である、が小町の和歌集にも、之れに類似の事がある。

即ち

日のてり侍りけるに雨乞の

和歌よむべきよし宣言によりて

千早振神もみまさば立さはぎ

天のとかはの樋口あけたまへ

之れが正歌である。前の歌は、理窟詰めで、俗耳に入り易いところから、有名になつたのであらう。

鶴毛蝶粉 (近松門左衛門)

近松巢林子作「最明寺百人女藤」は端なくも靈元法皇の乙夜の覽に入つた。法皇、或る時當時の名ある公卿をあまた召し集へられた折、右の「道行ぶり」の一章に「蝶の翼のおしろひを、草にこぼして梢には、鶴の霜毛をぬきかくる、雪は花より花多き」とあるを指して仰せらるゝには、是れは「圓機活法」雪の部に、鶴毛蝶粉の語があつて、石曼卿が、雪を詠じた詩を引き「蝶落ニ粉翼一輕難拾、鶴墜霜毛散未轉」とあるを和語に移したものであらう。いづれも方は秀

才であるが、到底彼の近松とやらには及ぶまい。斯かる詞才を以て和歌を詠じたら、秀逸は會毎に多くあるだらうと、歎感料めならざりしと云ふ事である。

破鏡流 (菅沼外記と其妻)

菅沼外記は江州膳所の藩士、曲翠と號して芭蕉門下の俳人であつた。外記の同僚に會我權太夫といふ者があつた。主君の寵を恃んで、不都合の振舞甚だ多かつた。外記之れを憂へ、會て權太夫を諫めたが聽き入れない。依つて或る日茶會に托して權太夫を自宅に招き、其惡事を責めて遂に之れを殺害し、己れも亦從容として自殺した。が、事情を明かにすれば主君の非を現はすこと、なるが故に、私の爭論に托して真相を掩うてしまつた。實情を知らぬ主君は大に怒り、外記の子内記に死を賜つた爲めに、菅沼家は遂に斷絶してしまつた。

外記の妻は、泉州岸和田藩士の女で、和歌を好み、また筑紫箏の妙手であつた。或る歲夫と共に故郷に赴き、播磨路を經廻つた旅行記を物したが、その文章の妙は時人の目を時た、しめ

た。夫と子とに死別した彼女は、剃髮して攝津の國の片山里に隠れ棲み、常に歌を詠み、箏を弾じて憂さを慰めた。その手馴れの箏の手は後までも残つて破鏡流と稱されて居る。

松の雪 (大高原吾)

赤穂義士の一人大高原吾は、子葉と號して俳句を能くした。吉良邸討入りの翌日、俳諧の師水間沾徳に寄せた書狀は左の通り

其後は彼是御無音無本意奉存候。何れも御堅固に御座候哉。さては私儀所存之一條難止今晚存立候趣に御座候。年來御懇意に罷成、一道御傳へ御厚情彼是以生々世々に及び候事に御座候。

山を裂く力も折れて松の雪

春帆、竹平は同じ道にて候。進す事は氣の毒、清泉は御存候ごとくにて候。さては恩借之御

ふとん。其儘打捨置申候。左様御心得奉頼候。御一句之御引導奉願候。以上
十二月十五日

沾 徳 先 師

子 葉

尙々尤世に沙汰御座候迄は、御さた被成被下まじく候。以上

無 善 惡 (小野篁)

嵯峨帝の御時、内裏に「無善惡」と書いた札を立てた者があつた。帝、篁に之れを讀めと仰せられると、篁は、讀めは讀めますが、畏れ多くて讀み奉るわけに参りませぬと言上した。構はないから讀めと再三仰せられるので、己むを得ず、之れは「さがなくてよからむ」と讀みて、君を呪ひまらされるものでござると申上げた。(落書は、嵯峨帝の離宮は無くもがなといふ程の意味である)すると帝は、お前でなくて誰がこんなことを書かうぞ、と仰せられたので、篁

畏まつて、さう仰せあらうと思つたから、讀むことを御辭退申上げたのでござると辯解した。帝、然らば、何にても書いたものは讀めるかと問はせられるので、何なりともお讀み申しませうと答へると、片假名の子の字を十二書かせ給ひて、之れを讀めと仰せられた。篁即座に「猫の子の仔猫獅子の子の仔獅子」と讀んだ。それで、帝も笑はせ給うて、何の事もなくて濟んだ。
(「子子子子子子子子子子子子子子」)

素 性 (仙石左京の女)

安政の頃の浪花の一条商の息子が、京都に赴き一夜一私娼の家に遊んで其家に二百金を遺れて歸つた。後で氣がついたけれども、どうせ無駄な事と諦めて其儘浪花へ歸つてしまつた。そして事の序に其事を番頭に丈け話をして置いた。

翌年番頭が所用あつて京都に行つた際、先きに主人の若旦那の遊んだといふ家へ赴き、それとなく其話をする。座に侍した女が、それは斯う云ふ品ではありませんか、と、前年の遺失

物を出して来た。扇先きが判らない爲めに今日までお預りして置いたといふのである。番頭感心して其金子を受取り、内金若干を贈りて之れを謝したが、どうしても受けない。餘儀なく歸りがけに戸の隙間から投げ入れて歸つてしまつた。

大阪に歸つてから其事を話すと、主人も深く其女の心懸けを賞し、之れを受け出して苦界を脱せしめ度いと云ふので、再び番頭を遣はして、女の母と共に大阪に伴ひ歸り、近所に置いて世話をしてゐた。一夜女の家に五人組の盜賊が押入つた。すると女は薙刀を揮うて二人を斬り三人を追ひ拂つた、其事官の知る所となり、糺問の結果、仙石左京の女であつたことが判明つた。左京は逆臣であるが、娘の心懸けに賞で、糸商は遂に之を息子の嫁に貰ひ受けた。

至 孝 (中根東里)

中根東里は伊豆下田の人、初め僧となり、後江戸に出で、儒學を以て身を立てた。性至つて孝で、常に能く父母に事へたが、東里の父は非常な酒好きで、東里はその爲めに一方ならぬ苦

心も骨折りをさせられたが、未だ曾てイヤな顔をしたことはなかつた。

或る日、例に依つて東里は提灯を提げて父の歸りを迎へに出た。ところが其日は父の酔が殊の外ひどくて、東里と他人との區別さへつかず、何と言ひきかしても一緒に歸らうとは言はない、そしてとうとう途中の樹の下に酔倒れてしまつた。

そこで東里は、家に馳せ歸り、母に向つては、お父さんは今夜某といふ家に泊つたが、他にも泊り客があつて蚊帳が足りませぬ、依つて、蚊帳を取りに歸りました、と言つて、家から蚊帳を持ち出し、父の酔臥して居る樹の下に蚊帳を吊つて、徹宵介抱し、酔の覺むるを待つて、お伴をして家に歸つた。

てれんいつはりなし (奥州)

奥州は江戸吉原茗荷屋の名妓で、好んで和歌を詠じ、兼ねて書を能くした。その容色を愛で、慇懃を通せんとする者あるも、容易に之れに従はなかつた。客を揚屋に迎ふる時の提灯には

表に「貞清美婦胎」と書して、婦の五徳を備へたるを自任し、裏には「てれんいつはりなし」と書いたのを用ひてゐた。

、 姫 薦 (山東京傳)

山東京傳 吉原に遊んで、當時全盛を謳はれて居た姫薦を名ざいで呼んだ。京傳は才子であつたけれども、男振りも悪るければ、その打扮も勿論其頃よく遊んだ大名など、は比べものにならないので、一向に厚遇なかつた。で、部屋に行燈に一首の狂歌を書き残して歸つてしまつた。

竹取のおきなさせんとふりつけし

さとの意氣地もかくや姫薦

太夫後ちに之を見て其凡客に非ざるを悟り、京傳だといふことを探りあて、その後向ふから呼んだが、京傳も流石に才子だから、それきり行かなかつた。

ナルホド侯爵 (西郷従道)

西郷従道、一武辨より出で、屢次臺閣に列し、文部、内務、農商務に大臣たり、人の獻言する者あれば、唯一語「なるほど」と應ふるのみ、また採否を言はず、甲是と言へば「なるほど」乙非とすれば「なるほど」此を以て世人侯を目して「ナルホド侯爵」と言ふに至つた。

佛に斷る (田崎草雲)

田崎草雲と、梁川星巖とは至つて懇意な間柄であつた。或る時星巖が、僅かの金策に窮して居るのを見て、草雲は快く之を引受けた。そして約束の如く入用の金子丈けを星巖に渡した。星巖は大に喜んで一時の急を免れたが、サテ考へて見ると貧乏者の草雲に、金策の出來たのが不思議でならない。そこで又他から工面して、草雲の許へ返しに行つた。

「ハ、ハ、御不審は御尤だが、御心配には及びませんよ、怪しい金ではないから……」

草雲はニヤリ々々笑つてゐた。

「實はネ、傳法院の老僧とは豫て昵近の仲だから、金策を頼みに行つたが、生憎留守で、歸りの時刻は判らないといふのだ。急場の入用と承つて居るのに、これは困つたと思つて、ふと見ると佛壇に在る觀世音の厨子に古代錦の戸帳が懸つて居る、そこで一寸それを借用して質入れしたまでのことだ。それも無斷ではない、ちやんと佛に斷つて來たのだ。」

流石の星巖も呆れてしまつた。そこで自ら質受した戸帳を携へて傳法院へ謝罪りに行つた。老僧は呵々と笑つて

「無頓着な先生のことぢやから、菩薩もお咎めはなさるまいが、今後若し急要の場合は、愚僧の衣類調度何でも勝手に入質をして差問へござらぬ。唯佛前の什器だけは、何卒御容赦にあづかり度いものぢや。」
と言つた。兩人は頭を掻きながら退出した。

雨 乞 ひ (其角)

三回祠邊の人集りを見て、何事ならんと其角は舟を其岸に着けさせた。上陸つて見ると近在の農夫數十人相集つて雨乞をやつてゐるのであつた。頭の禿けた其角を見て、僧侶と思ひ誤り農夫の中の物識りらしいのが出て來て、雨乞の一句を所望した。古來名歌の神力不思議の効驗を現はしたことは傳へ聞いて居る。自負心の強い其角は稍々心動いた。その顔色を見て取つた農夫の群は、只管請つて已まない、依つて其角一念を凝らし

夕立や田をみめぐりの神ならば

と吟じ、少時黙禱してゐると、見る／＼一天掻き曇りて、驟雨颯とばかり降つて來たので、農夫の喜びは言ふも更なり、其角も亦吾れながら不思議に思ひて其偶然の仕合せを悦んだ。

命より重きものあり (金看板甚九郎)

寶曆中江戸芝神明前に甚九郎といふ俠客があつた。或る時あわたしく其家に飛び込んで来た者がある。見ると面縛してゐる。甚九郎に訴へて曰く、われ曾て産を破り、過ちて盜賊を働きたる者である。今捕はれて斯くの仕末である。固より身から出た鎗であるから、他を恨むことはないが、唯われに一人の老母がある。今われ死せばまた之れを顧みる者が無い。希くはわが縛を解いて少時の間われに自由を與へられたい。此事他に頼むべき人がない。足下の俠名を聞いて身を投じたのであるから、何卒此急を救うて欲しい、と涙を垂れて居る。甚九郎稍々久しく黙然として居たが、やがて起つた其縛を解き、衣を更へしめ、且つ金三十兩を與へて曰く、われ貧にして多くを恵むことは出来ない、ホンの旅費ばかりである。速に此場を落ち延びるがい、とて、裏門から遁がしてしまつた。殆んど同時に捕丁が前門から入つて賊の所在を索めた。甚九郎曰く、賊の縛を解き、且つ之れを遁がしたのは僕である、どうぞ俺を縛つて貰ひたい、とて、從容縛に就き、尋で獄に投ぜられた。それから二ヶ月程経つと前の賊が自首して出た爲めに、甚九郎は免されることが出来た。其時奉行は曰く、汝の義心は賞すべきだが、汝の庇護した者は

賊であり、之れを縛した者は官である以上、其縛を解き其人を放つた罪は當に死に償ひするものぢや、と言ふと、甚九郎、仰せはいかにも御尤もであるが、俺には命より重いものがござる、俺はもと彼の賊を知らない、然るに賊は俺の名を知つて助けを乞うて来た、若し之れを救はなかつたら俺の名は廢れてしまひませう、命を完うして名を棄つるよりは、名を完うして命を棄つるが本懐でござると平然として答へた。奉行も莞爾として、いや見上げた心掛けた、それ程名を重んずるからは、今後「金看板」と稱してはどうか、と言はれたので、甚九郎も甚だ之れを榮譽とし、爾來人これを呼んで金看板甚九郎と稱するに至り、俠名益々現はれた。甚九郎は七十三で歿したが、長男も次男も俱に「金看板」の名を冒して任俠二世に傳へた。

猩々書伯 (河鍋曉齋)

△生首の寫生

河鍋曉齋は天保二年四月、下總の古河で生れた。

九歳の夏、五月の雨で汎濫した神田川の渦巻く光景を寫生しようとして、御茶の水の谷間へ下り、餘念なく水道橋の邊りを眺めて居ると、脚元近く波に打寄せられた變なものがあった。よく視るとそれは男の生首であつた。彼はそれを拾ひ上げて風呂敷に包んで我家に持ち帰り、間を窺つて寫生しようとして、内證に物置の隅へ匿して置いた。然るに薪を出しに行つた下女が之れを見付けて大騒ぎとなつたので、彼は其次第を兩親に告げたが、兩親は官の咎めを恐れて、それでは生首を發見した場所に産を敷いて、その上でそれを寫生せよと命じた。九歳の少年曉齋は、早速兩親の命令通り、元の河岸に生首を持ち來り、産の上に坐つて寫生に取りかゝつた。往來の少い處ではあるが、一人二人と集つて來て、此不思議な少年畫家の周圍は、見物人の山を成した。彼は此の生首を寫生し終つて觀音經に包み、河へ流して水葬した。

△火事の寫生

弘化三年正月、本郷丸山の阿部侯の火事は、所謂丙午年の大火で、西北の強風は佃島の邊までも焼擴けた。本郷三丁目に鳥の店を持つた幕府の御用達越前屋では、籠の中の雁・鴨・鶴

孔雀其他の諸鳥などの焼死ぬことを不憫に思うて、籠の戸を開けて一度に之れを放してしまつた。籠から放された諸鳥は、燃誇る火光を目蒐けて空高く飛び上つた。花か紅葉か、焔と煙の渦巻の中に亂舞する諸鳥の姿は、物凄程の美しさ(?)を呈した。曉齋の家も此火事に焼けたが、彼は硯と筆を手にし、積上げられた荷物の上にとつかと坐り込んで、心靜かに此悲壯なる光景を寫生してゐた。此安閑たる態度が手傳ひに來た親類の者の目に入り、大喝を喰はされたが、この時彼が描いた火事の寫生二枚は、永久に貴い紀念となつて遺つた。

△追悼能

狩野塾の塾生數十名は、毎晩のやうに塾を抜けて淨瑠璃の稽古所へむぐり込んだり、又は講談落語の定席へ出掛けたりしたが、曉齋ばかり餘暇に能狂言を學んだ。狩野陳信の祖母貞光院と諡した人が其事を聞いて、それは中々殊勝の至りだ、費用は要るにまかせて、出すから十分に勉強せよと、曉齋を勵ました。そこで彼はその恵を受けて能狂言を學んだ。この老婦人は常に曉齋の三番叟を見たいと語られ、又曉齋に於てもそれを舞つて御覽に入れやうと思つて居た

が、病の爲め彼女は果敢なくなつてしまつた。彼は深くそれを残念に思ひ、嘉永四年四月、貞光院の三回忌に、彼女の菩提所上野護國院の墓前に笛太鼓小鼓の囃方を招き、自分は正式の衣裳を着けて囃につれて三番叟を舞つた。

彼は一生を通じて熱烈な興味を能狂言に有てゐた。多くの場合に於て狩野派の古典主義に對する尊敬を忘れなかつた曉齋が、この貴族的舞臺藝術と共鳴する所の多かつたことは別に不思議でない、併し彼の藝術的謀叛心は、彼をして嚴肅な狩野派を去らしめ、得て兩極端の破綻から起る變奇な悲喜劇の一藝術を創造せしむるに至つた。又如何に彼が能狂言を愛したにせよ彼は決して温雅な態度の賞讃者ではなかつた。彼は能樂堂の貴族的靜謐境へ野鄙措大な庶民主義を平氣で持込んだ——單に衣服の點で除外例を作つたばかりでなく、能を見物して居て藝の妙に撃たれると、我知らず大聲を發して、「うめい！」と怒鳴り江戸ッ兒張りな罪の無い傍若無人を發揮したといふことである。彼は如何なる場合でも、他と妥協することは出来なかつた。又彼は妥協の意味を了解しない程正直な男であつた。

△奇 禍

狸を曉齋と稱された程、酒に目の無かつた彼は、酒の爲めに飛んだ奇禍を買ふに至つた。明治三年十月、不忍辨天境内の割烹店林方に催された俳人雨雀の書畫會へ彼も出席した。朝早くから其處へ出張して來客の集まる前から酒盃を舉げ初めた曉齋は、お正午過ぎ迄には既に五六升から飲んでゐた。

折から傍で聲高く話すのを聞くと、今日王子邊りへ一騎乗りでやつて來た外國人があつた。茶屋の女中が出迎へて其外國人にお一人ですかと問ふと、「イヤ馬鹿者を二人連れて來た。」と答へたのであつた。曉齋は直ちに筆を執つた、描き上つた畫を見ると、二人の男が足長島の間人に杵を穿かせて居るのと、手長島の間人が二人で大佛の鼻毛を抜いてゐるのであつた。これがまたどうしてか早くも官吏の耳に入つた。そして此二枚の滑稽畫は、正しく外國人を侮辱したものであるといふかどに依り、其畫會の席上から捕縛されてしまつた。一夜を獄舎に明かした曉齋は、翌朝醒覺めてから糺問を受けて、一時放免されたが、再び呼び出されて禁錮に處せら

れ、翌年正月三十日青天白日の身となる迄、九十日間、鐵窓の下に送つたのであつた。「曉齋畫談」の中にある獄舎の圖を見ても、その當時の獄舎生活が如何に悲惨を極めたかを知り得るが、斯かる無邪氣な滑稽畫に依つて、九十日間も獄舎に繋がれたことを思へば、當事外國に對して日本が如何に怯懦であつたかを追想し得られるではないか。(野口米次郎氏に據る)

芋頭 (服部綾足)

服部綾足は凌岱と號した。文章家としても、俳人としても一家の風を成してゐたが、後ちに片歌なるものを創始して、自ら片歌道守と號し、淺草雷門の側に棲つてゐた。

某侯綾足の人と爲りを愛し、嘗て三百金を賜うて畫を長崎の熊代斐に學ばしめた。すると綾足は直ちに妓館に赴き、馴染の妓を身受けして家を守らしめ、長崎に居ること六年にして歸つた。そして歸國を言上する折に、某侯に捧げた畫は、何かしら得態の知れぬ土塊のやうなものが畫いてあつた。侯が異んで之れを問ふと、芋頭だと答へたので、侯は其不敬を憤つて之を黜

けてしまつた。

彼は賀茂眞淵に就て和歌を能くし、書を學んで墨竹に巧みに、古學を唱へ、小説を著はす等多才多能の奇人であつた。

遙を空に (小野篁)

白氏文集一本渡來して御所に在り、嵯峨帝最も秘藏せられた。ある日河陽館行幸の時に、

閉閣唯聽朝暮鐘。上樓遙望往來船

と御製せられて、之れを小野篁に示された。篁、奏して曰く遙を空とすれば更に妙と。帝大に驚かせ給うて、之れは白樂天の句で、本と「空」とあるのだ、それを今お前の詩才を試みる爲めに「遙」として示したのだが、と、仰せられて、ヒドく其才を嘆賞せられた。

ではまたお目にかゝらう (東湖、象山)

藤田東湖が或時佐久間象山を訪うた。憂國愷世の意氣に於て互に譲らなかつた二人であるが一人は開國派の頭目、一人は攘夷派の領袖で、其主張は極端に相反して居た。互に聲を勵まして議論を上下したが、遂に一致點を見出し得なかつた。

「君のやうな人とは以來絶交だツ。」

さう言つて東湖は立ち上つた。が、愈々歸りがけに

「ではまたお目にかゝらう。」

と言ふと、象山隙さず

「既に絶交した以上はまたお目にかゝる必要ない。」

と、一本突込んだ。東湖は振り返りざまに眼を瞋らして

「いや、兵馬の間にお目にかゝつて、君の首を取るといふのだ。」

と、意氣軒昂であつた。兩雄の面目躍如たるものがあるではないか。

拂子 (宗祇法師)

宗祇法師は、時の帝より「花の下の宗匠」の名を賜はつた程の名譽の歌人であるが、常に一簞一笠、孤筇飄然として東西を歴遊し、吟咏自適して居つた。或る時道にて追剝に遇ひ、望むが儘に悉く之れを與へたが、賊は尙飽き足らず宗祇の長髯を強請した。市に賣つて拂子にするといふのである。そこで宗祇笑ひながら吟じて曰く

わが爲めに拂子ばかりはゆるせかし

ちりの浮世を捨て果つるまで

流石に賊も其無慾にして物に拘らぬ態度に感じ、前に奪うた物迄悉く返したといふ。

あちらむけ (上島鬼貫)

鬼貫は攝津伊丹の人、三郎兵衛と稱し、初めは酒造を業とした。或る時御殿の會に到り、何

にても俳諧申せとの仰せに、鬼貫頭を擡けて座敷を見廻すと、御床に土佐の伊某の書いた小野小町の繪があつた。請うて其掛物を賜はり、筆把りて小町の頭のあたりに先づ

あちらむけ

と五文字を書き、少時くして、

うしろも床し花の色

と書き付け、恐れ入りし風情で退り出でた。皆々あつと驚きて今日の會は三郎兵衛に負けたと
いうて其儘會を止めたさうである。

ではあるまいか

(横井時敬)

農學博士の横井時敬氏は多才の人で、嘗て理想小説「模範町村」を書いたこともあり、鴉勘左衛門の變名で「農閑出鱈目草」を書いたこともある。名文といふ程ではないが、平易で誰にも判りいゝが、唯一つ此人に癖がある、それは何事でも「斯く々々なり。」とか、「予は斯く信ず。」

とか斷定的に言ふことはなく、大抵の場合「ではあるまいか」である。責任回避の下心あつての事ではないかも知れないが、少し氣をつけると此「ではあるまいか」が矢鱈に出て來るので噴飯したくなつてしまふ。

下女を驚かす

(曲亭馬琴)

曲亭馬琴の下女が、突然親元へ歸つたが、翌日其親と共に馬琴の家を訪うて、手厳しい談判を始めた。それは馬琴が此下女を殺さうとしたといふのである。藪から棒の談判に、馬琴は當惑した。何かの間違ひだらうと段々訊いて見ると、フト思ひ當ることがあつて、馬琴は思はず手を拍つて哄笑した。それはかう言ふ譯である。馬琴が今書かうとして居る小説の中に、下女を殺ろす一節がある、其考案に凝つてゐた馬琴が、熱心の餘り、思はず知らず高聲を發した。

「さうだ、下女を殺さう、あれを殺すより外に名案はない！」

下女は夫れを聽いて驚いた。それで翌朝早速親元へ逃げ歸り、之れを其親に訴へた、偕てこ

そ親子打揃うての強談判と知れ、大笑ひで事済みになつた。

雀 と 猫 (中村芝翫)

近世の俳優の内、お大名といはれた故人芝翫。：：好人物といつて彼の優位の可愛らしい憎氣の無い、マア形容のしやうのない好人物はありませんでした。金なんでものは湧きものかなんぞのやうに思つてゐて。我が儘こそあつたれ、ソノ我が儘が子供々々してゐた。豊へばお刺身といへで鮓であらうが、比目魚だらうが「鯛」だといつてゐたし、肉となれば鶏だらうか豚だらうが「鴨」だとしてゐた。鰻は又アナゴでも鮓でも皆「うなぎ」なんです。

世間に疎い代りに理窟が分ればよく呑込む、ですから、家内さんが大抵でない。家内さんが盛立つてゐたんです。成駒の最辰も家内さん最辰が多かつたもんで。：：：しかしながら家庭の隠か、滑稽で、笑つて暢氣に暮してゐた家といつたら、成駒の家庭位なものも珍らしいでせう。たまたま擱着が起るかと思ふていと、實に滑稽な事なんですよ。一番お話ししたしませうか。「雀

と猫の騒動」といふので、實にお伽話。お子供衆のお笑ひにならうといふ趣向です。芝翫の家庭といふ考へを持つて聽いて下さらないと不可せんよ。

或日の事です。芝翫の座敷へ一羽の小雀が飛込んで來た。成駒屋は大悦び、「ヤア家の紋が入つて來た、此いつは有り難い。」と雀躍して家中で捉へた。大悦び、大恐悦だ、が、其小雀はただ口が黄い、鳥屋で籠を借りる時、「ソ、ハは鳥に逐はれたんでせう、助かりませんぜ。」と言つたが、果してその通り、二三日経つと死んでしまつたもんで、成駒屋が力を落とすと不可ないてんで、諸方を探しヤツと淺草觀音の放雀を買つて來て入れて置いた。芝翫はソノ事たア知らない、芝居から宅へ歸ると「家の紋はどうした」と雀の籠の前へ行く。嬉し相に眺めてゐたがなんだか、「大層瘦せたの、矢張籠の中ちや苦勞をするだらう。」と獨語を云つてゐた。實にハ、ハキなものです。スルていと同家の家内さんの實母さんが秘藏してゐるお玉さんといふ小雀があるんで、友禪の小夜着に縮緬の四枚布圍に包まつて面が憎いほど贅澤に育つてゐる小雀が寝ながら天井を見てゐて、フト雀の籠を見たから耐らない、飛起きて爪を磨き、籠へ飛付き、

いしり壊して雀をば喰つてしまつた。サア今度は成駒屋が歸る前にチャンとして置く譯にゆかない。此一件が解つたからさしもの御上人も怒つて、お玉さんは毆られる。「家の紋を喰つてしまいやアがつて業腹だ」といふを聞いて、女隠居はまた恐ろしく機嫌を悪くして、二階から降りない……間へ介まつた家内さんは大弱り。仕方がないから、紅雀を借りて来て見せたが、「家の紋は紅かアねえ」といふので、いつそ鳩にしたらと勧めたが聴かない、ソコで鳥屋を頼んで中々雀飼へないものといふ事を言聞したら、ソレに納得してしまつたといふ。眞に子供々々したお話ですが、芝翫の事だから可笑しい……(「幕末百話」より)

脱帽 (山路愛山)

所謂憲政擁護運動の餘炎のまだ冷めなかつた頃の事である。千葉縣の或る町に演説會が開かれて、尾崎愕堂が得意の雄辯を揮つた。當時愕堂の人氣は高潮に達して居た時なので、其姿が壇上に現はれると、誰言ふとなく「脱帽々々」の聲が起つた。樸直な地方の聴衆は周章て各自帽を脱した。すると場の一隅に居つたまんまるに肥太つた一紳士が、懐中からくいやくいやになつた烏打帽を出してすつぽり被つた。その拗ね者は誰あらう山路愛山であつた。彼は偶々其地方の某寺に都塵を避けてゐたが、退窟凌ぎにちよつと演説會場を覗いて見ると、愕堂の演説があつた。辯士に敬意を表して最初から脱帽をして居たのであるが、「脱帽々々」の聲を聴くと彼の反抗心はムクムク々々と其鎌首を擡げたのである。彼は演説會が終る迄遂に烏打帽を脱らなかつた。

習字を廢す (小川泰山)

小川泰山は幼にして書を能くした。松山天姥と云ふ書家が、嘗て泰山の書を見「此兒には實に非凡の書才がある、勉めて已ますんば將來必ず名を成すであらう。」と言つて司馬温公の勸學文を書き與へ、大に之れを勵ました。

泰山は其書を手本として一生懸命習つて居る内に、其文章の意味も自然に解つて來たから、

習字以外に大に讀書するの必要を感じ、此事を父に講ると、父も大に喜んで、山本北山の門に入らしめ、其處で學業を受けしめた。一日泰山太史公の文を讀んで居る中に、項羽が「書は以て姓名を記するに足る」といふ所に至るや、翻然として語る所あり、爾來習字を廢して、經學文章に依つて身を立てんと志を起した。泰山時に年僅に八歳であつた。

強情くらべ (幸田露伴兄弟)

文學博士幸田露伴の兄弟は傑物揃ひである。千島探險で知られた群司大尉が長兄で、露伴の次が「大阪市史」を編纂した幸田成友、音楽家幸田延子、安藤幸子は其妹である。

露伴の釣道樂は有名である。或る時兄の群司と共に横濱で沖釣に出掛けたことがある。生憎船を漕ぎ出すと間もなく、怪しい黒雲が天の一方に現はれて、段々それが擴がつて來た。永い間海上生活に慣れた群司大尉は、此雲行きを見て天候の變を觀測し得ない筈もなければ、釣道樂の露伴にも大抵見するのつかぬことはなかつたけれども、兩人は一向そんなことに頓着な

く、豫定の處へ船を行つた。釣を始めると、果して雨は沛然として降り出した。雨具の用意の無い二人は、見る間に濡れに濡れた。それでも互に何とも言はない、それが三十分や一時間ならばまだしもだが、正午頃から夕方まで、四五時間も間斷なく降る雨の中に、兩人は頭から衣物から腐る程濡れて、寒さにガタガタ慄へながら、とうとうどちからも、歸らうと言ひ出さなかつた。そして夕方の霽れ上るのを待つて、漸く岸に漕ぎ付けた。兄も弟も、お互に腹の中では對手の強情に驚いたことであらう。

隠れ家 (戸田茂睡)

戸田茂睡は、徳川氏の臣渡邊忠の第六子、寛永六年五月十九日に生れた。伯父戸田藤右衛門に養はれ、本多忠國に仕へて三百石を賜つたが、延寶の末に仕を辭して淺草金龍山附近に隠栖した。「梨本集」を編んで、和歌の制の亂れたことを歎じ、世間徒らに詠歌の派を立て又制詞などいふものを定めて所謂琴柱に膠する者の多いことを誹つた。

塵の世と思ふ心の積りては

身の隠れ家の山となりける

といふ歌を詠んで「隠れ家の茂睡」の名を世に喧傳せられた。

日本古狂生 (頼三樹三郎)

頼三樹三郎・尊攘論を主唱し、幕府の捕ふる所となりて獄に在り、積鬱無聊遣るに由なく同獄の高橋兵部権大輔 伊丹藏人、山田勘解由等と共に、詩歌を談じて纔に慰めた。獄舎の番卒等私に其話を筆記して之れを骨董集を稱して後に傳へた。已にして幕府漸く決し、三樹を死刑に處す。三樹の刑に臨むや從容自若、詩歌各一首を賦した。

排雲手欲掃妖穢。失脚墜來江戸城。

井底痴蛙過憂慮。海邊大月缺高明。

身臨湯鑊家無信。夢破鯨濤劍有聲。

風雨他年苔石面。誰題日本古狂生。

まかる身は君が代おもふ真心の

深からざりししるしなるらむ

好色の辨 (西笑)

西笑は伊豫の人、叡山に上つて大慈精舎の住持たりしことがあつた。好んで楞嚴維摩の諸經を讀み、又儒雅を喜び、殊に詩酒に親しんだ。當時叡山には猶百二十の精舎があつたが、僧侶の風俗猶往時戰鬪の氣を脱せず、驕慢褻躁の者多く、書を讀み韻致を解する者などは極めて稀であつた。西笑斯かる徒と交ることを欲せず、山に在りては戸を閉ちて書を讀み、山を下れば親友梅辻春樵を訪うて、酒を酌み詩を談つて夜を徹するを例とした。

然るに或る時西笑色を好んで破戒の行ひありと傳ふる者あり、衆議叡山を追放することに決した。西笑は唯々諾々、山を下つて京北に一草庵を結んで此處に住しだ。春樵一日西笑を其庵

に訪ひ、問うて曰く、子前に好色の誹を受く果して眞か、曰く信なり、問ふ今住する所に妻あるか、曰く無し、問ふ何の色を好むか、曰く凡そ色は春花より艶なるは無く、秋葉より實なるはなし、花の艶は嵐山に如くはなく、葉の美なるは高雄に若くはなし、唯花と葉の色のみならず山水に山水の色あり、煙霞に煙霞の色あり、衲皆之を好む、紅裙紫袖の妖童は以て春花秋葉の色に比す可し、蛾眉翠黛の娼婦何ぞ山水煙霞の色に異ならん、衲最も之を好みて、擇ぶことなしと、春樵曰く、子今嶽を離れて放縱、何ぞ公に妻妾を蓄へざる、西笑弗然として曰く、是れ淫を好む者にして色を好む者に非ず、女子を視て耳目を悦ぶは是を好色と爲す、女子を蓄へて行を穢す、是を淫を好むと爲す、衲未だ曾て淫を好むことあらず、唯色を好むのみ、苟くも淫を好むのみならば安ぞ必ず嶽僧の爲に追放せられん、嶽僧は色を好む者甚だ少にして淫を好む者甚だ多し、淫を好む者は口之を言ふを諱みて唯人の識破するを恐る、衲の好色此に異なり猶ほ人の山水煙霞を好むが如し、好む所の事公然衆人廣坐の中に陳して諱む所なし、と。

西笑嚮きに好破色戒の批難を受けて叡山を追放さるゝに至つたのは、或僧、西笑が案に對し

て讀書する傍らに、美女の侍立するのを見、豫て西笑が衆僧に伍せざること不愉快として居つたので、熾んに此事を流布宣傳した爲めであつた。然るに西笑の案側に侍した美女といふのは西笑自ら天女に象つて刻んだ木像に、婦人の衣を纏はしめたものであつた。西笑は、韻致を解せざる俗僧に交るより、語を解せざる美女に對するを快しとしたのである。それを一語の辯解に及はずして衣を拂うて去つたのは、よく／＼叡山を見限つたからである。

開く手のうち (山崎櫻齋)

山崎櫻齋は本姓橘氏、名は春秀、平三郎と稱し、幕府の大御番小普請であつた。拳の指戰に名高く、山の手の大關である。その拳の名弘めに配つた團扇に、自詠の狂歌あり、曰く

握るこぶしに開く手のうち

白絲紅絲 (瀧鶴臺妻)

瀧鶴臺の妻は極めて醜婦であつた。其未だ嫁せざるとき、父母は容易に縁談の無からんことを憂ひ、若し娶る者あらば、身分を問はず之れに應ぜんとしたが、女は仲々高々とまつて、妾は鶴臺先生の如き人でなければ嫁らないと云つて、頑として聞き入れなかつた。それを傳へ聞いた者は、誰も彼も其非望を嗤つた。然るに其事いつしか鶴臺の聞く所となり、之れは餘程變つてゐる、と、友人等の抑止を聴かず、迎へて其室としたが、果して貞賢頗る内助の功があつた。

或る時其袂から、赤絲の毬を落した。鶴臺訝つて之れを問ふと、妻答へて曰く、妾は常に二つ毬を持つて居る、そして心に善意を生じ美譽を爲した時は、その毬に白絲を結びつけ、又惡念萌し、惡行のあつた際には、今一つの毬に赤絲を結びつけることにしてある、そして今日では、白毬の大きさがどうやら赤毬の大きさと同じ位にはなつたが、それでもまだ白毬の方が赤

毬の方より大きいところ迄はゆかないので、油断なく心づけて居ります。と。

鶴臺大に其篤志を賞し、琴瑟益々相和したと云ふ。

姓名創造 (豊川良平)

岩崎彌太郎の従兄弟で、所謂三菱王國建設の殊勳者たる豊川良平は、本姓小野、名は春彌と稱した。明治維新の頃青雲の志を懐いて郷關を出で、天下に名を舉げんと欲し、豊臣秀吉、徳川家康、張良、陳平の四傑の姓名から、各々一字宛を取り來つて自ら豊川良平と改稱し、遂にそれが本姓名となつた、最初政界に活躍する考であつたが、岩崎との關係上、思ひ切つて其方面に驥足を伸べることが出来なかつた。併し犬養木堂、大石裁松等政界の巨頭と親交あり晩年には大隈、桂の提携を策し、憲政會創立の際には、裏面に在りて可なり重要な役割を勤めた。

富嶽百景 (池野大雅)

「近世畸人傳」の筆者は傳へて曰ふ。

△幼にして穎異

大雅地氏、諱無名、字貸成、通名秋平、書畫には或は九霞山樵と書す、京師の人、爲人肅敬、寵辱をもて心をおどろかさず、善く物を化して、苟も合し志を感さず、外疎放にして、内實修、人と交りて謙損し、しかもおもねらず、禮法に簡にして、往くべくして往かず、答ふべくして答へず、是を義にかへりみれば、いまだかつて失ふところあらず、惠みて弗望、廉にして弗歲、其取予得失において恬如たり、平生行事多く人の不意に出づ、以茲畸人の目あり、幼にして穎異、學文學書能くせずといふ事なし、獨り繪の事に長ず、山水を圖する、尤も妙なりと藝誌にいへり。…初めて爲書、五歳書を善くす、一日黃檗に至り、黨頭千果禪師に調す、席上大楷書をなす、禪師深く奇とし、偈を賜ひ寺中の大衆もまた詩を賦し

て是を賞す、初め養拙様を法林寺中清光院に學び、後古法帳をとりて晋唐に沂り、畫は紀の國に國きて祇南海に畫法をとひ、又大和の柳里恭に彩色の法を學ぶ、又土佐光芳に國畫の法を學ぶ。

△漢法の山水

時に望玉蟾とともに相いへらく、從來畫家いまだ漢法を學はず、俱に是れをはじめんと、玉蟾は唐伯虎を學び、此の翁は梅道人を學ぶ、各竟に一家を成せり、後又倪雲林に倣へり、漢法の山水を畫きはじめたる頃、扇面に圖して自から携へ、近江、美濃、尾張の國々に售らむとす、人多く怪しみて買ふ者なし、於是空しく京へ歸らむとて、瀬田の橋を渡る時、其扇を出だし、ことごとく湖水に投じて曰く、是をもて龍王を祭ると、後いくほどもなく、書畫の名、海内に擅なり、好みて名山に遊び、高峻幽奥到らずと云ふことなし、即ち取りて筆端の趣をなす、しばしば富士に登るに、毎に其の路を異にして、富士の圖一百を作る、其の變狀みな自から見る所、古今畫工いまだ及ばざる所なり云々

と。大雅堂の奇行に就ては、本山荻舟氏の『名人奇人』がよくこれを傳へて居る。今左にその一齣を抄録して見よう。

似た者夫婦

大雅堂は當時祇園のほとりに住つてゐるが、急に思ひ立って大阪へ行くと、無雑作に家を出て、建仁寺の前邊り迄すた／＼と來かゝると、不意に後から「もし／＼」と呼ぶ女の聲が聞えた。

振り返つて見ると、息を切らして追蒐て來たのか、額の汗を拭ひながら、無言で一束の筆を差出した。ハツと思ふと粗忽しい彼は度を失つて、幾度もそれを頂戴しながら、「これは何處の御婦人か、よく拾つて下された」と夢中で禮を云つて、其儘すた／＼と歩き出した。焉んぞ知らん、筆は我家へ忘れて出たのを、後でそれを發見した妻の町子が、驚いて後から届けたのだつたが無頓着な所夫がそれと氣の付ない容子を見ると、町子も亦無言で其儘引返した。似た者夫婦で、何方も劣らぬ變り者だつた。

大和屋

大阪へ出た大雅堂は、既に當時の大家であるから、禮を厚うして八方から引張風の様に招待を受けた。其中に大和屋某といふ豪商、町人ながら大雅堂の名を慕ふて、店の暖簾を是非共先生に書いて頂戴き度いと枉ての頼みに、無造作な彼は快く承諾して、早速例の筆を携へて同家へ赴いた。

下へも置かね歡待を斥けて、直ちに揮毫の準備をさせると、主の需めは「大和屋」といふ屋號の三字を大書して呉れといふのだつた。五歳の年に黄蘗山の衆僧を駭かした彼の筆勢は、年と共に遒勁を初へて、立地に龍蛇の躍るが如く、先づ「大和」の二字が成つた。

すると急に、何を思ひ出したか彼は、突然筆を擱いて坐を立ツた。「どうかなされました」「いや少し」いふかと思ふと不意に座敷を出た儘、忽ち姿は消えてしまつた。

初めは廁へでも立ツたものと、別に氣にも留めなかつたが、待てど暮せど歸つて來ぬので、不思議と家中を捜させたが、影もないので騒ぎとなり、人を八方へ出して見たけれども、皆

目行方は知れなかつた。大雅堂先生が神隠しに遭つたと奇怪な風説が立つてから、五日目、けろりとして大和屋の暖簾を潜つた當人は、大口を開て呵々と笑つた。「何の、大和と書いて見ると、不國吉野の事が心の中に浮んだちや、一目千本が満開ちやらうと思ふと、矢も楯も堪らぬで、一寸花見に行て來たのちや。併し幸ひ間に合つて好かつた。」
大和屋の人々は、呆れて眼を睜るばかりだつた。大雅堂は平氣で墨を磨直させて残つた「屋」の字を一書した。

△や、これは粗勿

大雅堂は江戸へ下つて、暫く某藩邸にある知人の許へ足を留めた。折柄六月眞夏の盛り、偶と都の事を思ひ出すと、恰度其日は祇園の社に、御輿洗ひの神事が催される當日だつた。無邪氣な彼は早速それを學ばうと、紙を以て偶人形を拵へ、萬燈を點し囃し立て、祇園祭ちやくと邸内を練廻つた。

藩侯の世子が其噂を聞いて、「俺も見やう、一番に此處へ持て參れ。」と、臣に命令て其趣を傳へさせた。大雅堂は囃子に紛れて聞えぬ振をして、相變らず子供の様にそこらを押廻つたり。世子は急込で、幾度か催促の使を立てた。大雅堂も今は詮方なく「只今參らうとする處で」と云ひながら、故と持つてゐた萬燈の灯で、紙人形を焼失つてしまつた。使の者は蒼くなつた。

「や、これは粗勿」と、さもく過失の様に恐縮して見せた彼は、やがて微笑みながら「尤もこれは祇園の社へ、奉納の積りで作りましたもの、燃失た處を見ますと、扱は人に見せ度くないとの、神慮かも測られませぬて、は、は、は、御前よしなに。」
人を馬鹿にした挨拶だといふので、忽ち邸を追拂はれてしまつた。

又「近世畸人傳」には、大雅堂を尋ねた某僧のことを左の如く傳へて居る。

△奥州の奇僧

大雅江戸より奥州に遊びし歸るさ、いづこにてか、禪刹に入りて午飯を乞ふに、住僧は他に行きてあらざりしかども、こゝろよくもてなして飯茶を進めたり、されば大雅卒に一偈をと

いめて去りぬ。住僧歸りてその偈を看て甚だ賞し、これが和を作り、跡を追ひて京の方に赴きしに、道路の間逢はず、つひに京まで來りてこゝかしこ尋ねれども、彼の偈に池無名と書けるまゝにとひたれば、其の名を知る人なし。もとめ佗びて空しく歸らんとせしに、せめて東山の寺社拜み給へと人の勸するにつきて、まづ祇園の社に詣でたるに、繪馬殿に掲げし蘭亭圖に地無名と記したるを見つけて、やがて坊に入りてとひて、始めて其の所を知り、到りて對面に及びしが、今は本意とけたり京に用なしとて、其の日旅立けるとかや。云々

△碑文由来

大雅の歿後、門人等相議して、其の遺せし行李其他を搜り、多くの書畫を得た。當時大雅堂の名は驚く可きものであつたから、其の價も積んで七百兩許りになつた。門人等は此金を以て老師の不朽を謀るべしと議し、柴栗山に遣つて碑文を書いて貰ひたいと頼んだ。すると栗山は曰く、「自分に一策がある。それは一つの大きな石を求めて人の像を作り、其胸間に大雅堂の三字を彫刻する。其他には更に一字をも書かずに、之を栗田口路傍の山腹に置くならば、旅客の

此處に至るものは、皆大雅堂佛として詣拜する、斯くて其名は後世に至つて益々傳はるべく老師も亦無可有の郷にあつて一笑するであらう」と。而も門人は其の言に従はない、此に於て栗山は更に一策を立てた、「瑣々たる文字を以て一片の石に記することは、其費數十金に過ぎぬ其の餘は京都の貧民に分ち、其の事を碑文に載せたならば、一層の美事では無いか」と。門人は又た之をも肯かない、斯くて後、遂に蕉中禪師の撰文によつた碑文が出来たのであつた。

此夫にして此妻 (池野大雅妻)

玉瀾は所天と一緒に冷泉殿の邸へ上つた。大雅堂は豫て此卿の知遇を受てゐたから、玉瀾も其畫名を知られて、一度一緒に參れとの招きに應じて伴はれたのだつた。

玉瀾の生家は祇園林に名を知られた、梶の茶屋の跡だつた、初代の梶は和歌をよくして、當時の文人雅客の間に持囃された。其跡を襲だのが玉瀾の母の百合で、これも亦斯道の躰みがあ

ツた。——茶店の女が和歌を詠む、それだけでも評判の種となつて、地方迄謡はれた家に人と爲つた玉瀾の町子が、幼い頃から天爾波を憶えて、三十一文字の並べ方に、憂身を宴したに不思議はない。

冷泉殿は和歌の家、此卿に見えるのは、旁以て敷島の道を學び慶い爲めでもあつた。生れは所柄、玉瀾の名——柳里恭の別號玉桂の一字を貰つたのだつた——は、豫て聞く、怎麼雅びな女かと、御内の女房達は争つてこれを垣間見やうと弄めいた。豈圖らんや大雅堂が連て、邸の門を潜ツだ女は、糊の硬い木綿衣物を纏ふて、手には魚の籠を提けてゐた。

「とんと草鞋を穿かぬ入原女の様でムんすな。」
と幼ない女房達の中には、聲に出して吻々と笑ふ者さへあつた。併し玉瀾は平氣で卿の目通りへ出た。所天は高名の畫家、而も招かれて邸へ土ツたのであるから、唯一通りの禮儀だけで事は足るのであるが、無頓着に似て物堅い玉瀾は、苟見にも物の師と頼む人の許へ、初めての入門に際して、季節の謝物を携へて往つたのだつた。

殿の卿は其景迹を喜んで「歌は總て心を以て基とする、そなたの歌も、其氣象に合ふ様に、添削して取る。」と仰せられた。面目を施して、目通りを下つた彼女は、其後も屢詠草を携へて卿の門を潜ツた。

今で云へば洒落者の卿は、或時眞面目臭つて御前へ出た玉瀾に對し、故と興じて赤前垂を引出物にした。彼女はそれを頂戴して歸つて、春になると母が名残の茶店へ、娘の如な顔をして自慢に締て出た事もあつた。建仁寺の畔に妻の顔を見忘れた所天に對して、其儘口も利かないで別れた事は前にも記した。

崎人の所天に應はしい妻、而も家庭圓滿に一生連添つた大雅堂に、先立て後の玉瀾は、形見の三絃に合すべき箏の調べも空しく、清く淋しい、孤獨の餘生を送つてゐたが、所天に別れて九年振、天明四年九月、溘焉として其後を追つた。(本山萩舟氏「名人崎人」より)

此節のやうに朝湯が無くなつてはどうして居るか知らないが、脚本家の岡本綺堂は、生粹の江戸つ兒丈けに、朝湯が自慢で、雨が降つても風が吹いても缺かしたことがない。而も綺堂の入浴は、湯に漬りに行くのではなくて、脚本の構想を纏めに行くのだから、鳥の行水のやうにチャブ、一浴すると、流し場にどつかと坐り込み、「どうせさうでせうよ、妾なんざアかうやつて居られる身ぢやないんですからね。」などと、取留めもないことを、小一時間も喋舌らないうちは流し場を起たないので、初めの内は誰も彼も狂人だと思つたさうである。

佛も人の案山子 (環溪)

環溪、俗姓は細谷氏、越後國西頸城郡名立町の人、後、從一位久我建通の義子となつて久我氏を稱した。十二歳清涼寺堅光に依りて薙染し、回天の法を嗣いで興聖、豪徳の二刹に住し、ついで永平を董し、朝廷より經學天眞禪師の徽號を賜うた。

曾て教部省が、神佛二宗を合して大教院を設け、神官僧侶各々一人を擇んで輪番を以て二教

に關することを行はしめた。環溪、輪番官長となつた時、神官某なる者、ひそかに之れを困しめんと欲して一策を案じ、環溪に向つて曰ふには、神社の祭典を行ふ際に、僧侶が法衣を着け、珠數をつまぐりながら、魚鳥の死んだものを神前に捧げるなどは甚だ似合はしくない。斯かる際には宜しく僧侶にも烏帽子を被せ、直垂を着せることにしたいものだ。と、神官等は一同手を拍つて賛意を表し、定めし環溪が閉口するだらうと其顔色を窺つてゐたが、環溪は一向驚いた風もなく、いかにもそれは名案である、僧侶は死人にさへも手を觸れるものだから、魚鳥の死んだものを神前に捧げるなどは何でもないことだ、また烏帽子も直垂も無論著ることにしませう。その代りお寺に来て佛式を行ふ場合には、諸君も髪を剃つて法衣を着けることにして貰ひ度い、と出たので、神官等もこれには閉口してしまひ、重ねて其事を云ひ出すものがかつた。

環溪は、禪燕の餘俳諧に遊び、曾て俳句を學ぶ者の爲めに、芭蕉古池因縁に著語し、古池眞傳を物したことがある。句あり曰く

獅子吼ゆる音や谷間の雪解水

六十の春や行脚の旅仕たく

達磨忌や女海灘に蘆一つ

貸切の舟に世帯や雪の夜

箔ぬりの佛も人の案山子かな

あまとなりても (宮木)

宮木は、播州室ノ津の遊女で、才色俱に勝れてゐた。曾て書寫山の性空、結縁經を供養せん

とした際、宮木布施を申し出でたが、遊女は罪障多しとて受納されなかつた。依つて

津の國の難波の事が法ならぬ

遊び戯れなりとこそ聞け

と詠じて諸行實相皆佛法の意を述べた。

中納言顯基、之れを寵して一時京都に伴うたが、後寵衰へて室に復る途中、顯基の家來に
遇ひ、丈なす黒髪を剃り落し、夫れに

盡きもせぬ憂きを見る目の悲しさに

あまとなりても袖は乾かず

といふ一首を添へて、顯基に送り、世を垂て、尼となつた。

山ばかりなる五合庵 (良寛)

△愛竹

良寛は、非常に竹を愛した。ある時庵の床下に筍が生へて、伸び兼ねて居るのを見つけ、
床板を起してやつた。そしてその竹が段々伸びて天井に支へるやうになると、今度は竹の出ら
れる程天井を破つて、之れを育てた。

△盜賊

或る時いつもの如く市へ出て食を乞うて歩いた。折悪しくツイ此間盗難に罹つた或家の前を通ると、良寛のむさ苦しい風體を見た其家の者共、これはてつきり前夜の盗賊に違ひないと馳せ集つて之れを捕へ、散々打擲した上、土に穴を掘つて埋めやうとした。たまく其處へ良寛を知つた者が通り合せ、愕いてその良寛禪師なることを告げたので、人々大に恐縮し、直ちに縛を解いて三拜九拜其罪を謝した。そして何故一言も盗賊でないと仰せられなかつたかと訊ねると、良寛は、業既に此に至るのみと云つて、些しも意に介せざるもの、如く、「うつ人もうたる、人も諸共に如露亦如電應作如是觀」と諡ひながら去つた。

△かくれんぼう

良寛は、至つて子供が好きで、到る處子供を集めては毬投げ、草合せ、提迷藏などして遊んで居つた。ある時また例の如く提迷藏をやつて、目を閉ぢて、夜遅くまで辻に佇立てるた。子供等がをしへないで家に歸つてしまつたのを、いつ迄も正直に待つてゐたのであつた。

△可欺不可誣

某の家に牡丹園があつた。毎年花時になると良寛は屹度やつて来て、一枝貰ひ受けて行くのであつた。園の主人、曾て良寛に書を索めたが、まだ約を果さなかつたので、或る時一計を案じ、良寛が来て花を折るのを見、伴り怒つて良寛を一室に幽閉してしまつた。そして番人に、書を書く迄は歸してはならぬと命令けて置いた。やがて良寛は主人の思惑通り書いて歸つたが其句は「可欺不可誣」とあつたので、主人は大に赤面して愧ぢ且つ悔いた。

△誰か来たかよ

又、或る色好みの男が、良寛を訪うて書を請うた、良寛すなはち誰が来たかよながしの隅に

鳴いた蚯蚓が音をとめた

といふ俚諺を書いて與へた、どんな強意見も耳に入らなかつた某も、其後は大に行ひを慎しむやうになつたといふ。

△鵬齋教を受く

龜田鵬齋北遊の時、たま／＼良寛の書を見、激賞して神品と爲し、特に五合庵を訪うて待坐
半日、草書の訣を受け、喜んで曰く、老師に逢うて始めて草書の妙を悟入す、われ是より一格
を長ぜん、と、良寛はまた詩歌に於ても巧を求ずして天真流露尋常詩家に見る能はざる妙を發
揮した。

△摺鉢

「來て見れば山ばかりなる五合庵」には、摺鉢一つの外殆んど何物もなかつた。良寛はそれで
味噌も摺り、粥も煮た、顔も洗へば手足も洗つた。「焚くほどは風かもて來る木の葉かな」と咏
んだ良寛の境涯は眞に羨むべきではないか。

△歌集

良寛には歌集が一卷ある。因より後人が、彼の詠み棄てたものを拾ひ集めたものである。
今その中から數首を左に掲げる

いにしへの人のふみける古道は

あれにけるかも行く人なしに

子ども等と手毬つきつゝ此里に

遊ぶ春日は暮れずともよし

久方のあまきる雪と見るまでに

ふるは櫻の花にぞありける

風すゞし月はさやけしいざ共に

をどりあかさむ老のなごりに

いざうたへわれ起ち舞はむぬば玉の

今宵の月に寝ねらるべしや

辭世

かたみとてなにのこすらむ春の花

夏ほとゝぎす秋はもみぢば

扶桑第一梅 (龜井少琴)

龜井少琴は元鳳の女、書を能くし又詩に巧みであつた。雷首なる人會て「贈少琴女史」の詩を寄す、曰く

二八誰家女。嬋娟眞可憐

君無ニ王上點。我爲ニ出頭天

と。王上の點は「主」なり、出頭の天は「夫」なり、蓋し、若し定まる主がなければ、吾れ共夫婦たらんとの意である。少琴直ちに之に應じて曰く

扶桑第一梅。今夜爲レ君開

欲レ識ニ花眞意。三更踏レ月來

訥辯の雄辯 (三宅雪嶺)

△南無阿彌陀佛

博士三宅雪嶺の演説は、所謂訥辯の雄辯として名高いものである。その千斷つて投げつけるやうな一語々々には深い含蓄があつて、聴衆はその意味を考へ且つ味つてゐると、また次の語が出て来る。屹音が少しも屹音のやうに感じない所以である。

雪嶺、會て某處の講演に招かれて赴いた。前席講師は博士谷本富であつた。演題は「南無阿彌陀佛」といふので、谷本一流の雄辯弘辯を發揮した。それ迄は無難であつたが、壇を降るに際して、愛嬌のつもりでこんなことを言つた。

「私の後には三宅雄二郎といふ方が控へてゐる、名前は雄二郎だが、雄辯家ではない……」代つて雪嶺が壇上に現はれた。演題は何も掲げてなかつた。

「只今谷本君が、何か言はれたが、私の名は雄二郎であつて雄辯とは言はぬ、雄二郎が雄辯でなくとも、差支はない筈だが、谷本君の名は、富と讀むか、富と讀むか、どちらかであらうが、併し御本人は餘り金持とは見えぬ、して見ると或は富とでもお讀みになるか……」

聴衆はドツと笑つた。谷本は樂屋で頭を掻いた。雪嶺は猶語を續けた。

「谷本君は、南無阿彌陀佛の講釋をいろ／＼されたが、南無阿彌陀佛といふことは、ソ、ナ、ナ、六ヶ敷いことではない、ア、イは唯一種の掛聲に過ぎない。橋の上から身投げする女は、西方へ向つて手を合せ、サテ「南無阿彌陀佛」と叫んで、ド、ブ、ンと飛び込む、水へ飛び込む掛聲、此世から彼世へ行く掛聲、娑婆から極樂へ移る掛聲……」

聴衆の記憶には、谷本の該博な引證澤山の南無阿彌陀佛の講釋が、いつの間にか失せて、雪嶺の平俗にして而も奇警な新解釋のみが鮮かに残つた。

△ 嫂の 周 六

古島一雄が、東京市から理想選舉を標榜して立候補した最初の逐鹿戦の際、雪嶺も應援辯士として演壇に起つた。雪嶺の前席は黒岩周六であつた。雪嶺登壇して開口一番

「只今の辯士黒岩周六君は、世間から嫂の周六と迄言はれて居る男である、その嫂の周六、ア、ム周さへ、褒める程の男であるから、古島といふ男も、只者でないといふことだけはわかる。

嫂の周六が……」

これが、餘人であつたら、黒岩も黙つて引込まなかつたらうが、對手が雪嶺とあつて、苦笑しながらも事なく済んだ。

△ 大學で 總長 攻撃

山川健二郎が帝國大學總長時代、雪嶺招かれて大學の講堂で講演をした。丁度世間では普通選舉の問題の矢筈敷かつた頃のことである。

「學校で看板を掲げるのは何の爲めか、學生のみの爲めならば、看板を掲げる必要はない、自分の學校を間違へるやうな學生はあるべきでない、それにも拘らず、大抵の學校で看板を掲げるのは、世間に示す爲めである、學校の先生は、學生に教科書を教へて居さへすればそれでいゝといふものではない。殊に大學の先生、而も總長などいふ者は、一世の輿論を指導する丈けの見識抱負を有せねばならぬ。普通選舉が、善いか悪るいかといふ問題の起つた場合、そしてそれが國民間の矢筈敷い問題となつてゐる場合、大學總長は宜しく自家の意見を公表すべきで

ある。若し政府の執つた態度が良いとするならば、それを援けて世間の攻撃に對抗するがよからう。政府の執つた態度が誤つたとするならば、理非を説いて其態度を改めさすべきである。それは政府の碌を食んで居る官吏として、當然のことだ。世間では、人格がどうかの云ふが、泥棒をしない、法律に觸れない、といふ丈で人格者であるならば、世間に人格者は餘る程ある、意見が無ければ無いでい、正直にさう言へばよいのである。其地位に居りながら、言を左右にし、態度を曖昧にして、一時を糊塗せんとするが如きは、斷じて眞の人格者の爲すべきことではない。

と、言々風霜を挾んで、頗る峻烈を極めた。場所は大學の講堂であり、被攻撃者は時の總長であるから、聴衆(大部分は大学生)も最初のうちは、流石に遠慮をしたであらう、ひつそりして聽いてゐたが、雪嶺のアノ訥辯に火のやうな熱を加へ來り、右の手を矢鱈に不器用に振廻すやうになると、我を忘れて盛んに喝采を送つた。

雲井までとは (内山眞龍)

内山眞龍は遠江國大谷村の農、幼にして學を好み、廿一歳賀茂眞淵に謁して皇學及び詠歌の道を學んだ、初めて「山家花」の題下に詠じて曰く、

櫻咲く山にし住めば白雲の

深き宿とや人も見るらむ

嘗て其著「日本紀類聚解」を朝廷に獻じ、畏き御沙汰を拜す、歌あり

長濱の浦のあしたづ千代經とも

雪井までとは思はざりしを

唐の書物 (古梁)

古梁は俗姓笹野氏、相模國高座郡八王子村の人である。

ある時、齋に豪族某に招かれたことがあつた。古梁の他にも多くの僧が來り會した。某殊更に魚を料理して薦めると、他の僧はいづれも顔を見合せて箸を執らなかつたが、古梁ひとり濟まして悉く之れを平けてしまつた。傍らに居つた僧見兼ねて古梁の袖を惹き、「之れは魚ですが……」と告げると、古梁は一層濟ましたもので、「之れが魚といふものでござるか、それにしてもあなたはよく魚だといふことを承知でござるナ。」

瑞巖寺に居つた頃、門前の農家に、ひどく嫁を虐待する姑婆があつた。そこで古梁狂歌を詠んでこれを其老婆に示した。

この婆々は唐の書物に似たる婆々

讀むたび毎によめにくきかな

老婆も大に愧ぢて、爾來その行ひを悔めたといふことである。

白河樂翁、曾て仙臺に遊んで古梁を訪ひ、俱に舟を松島に浮べて詩歌を唱和したことがあつた、後ち樂翁人に語つて

「松島の景色は結構ぢやが、どうも氣味の悪い老僧が居るんで喃。」
と言はれたさうである。

やまどの女郎花

(龜遊)

龜遊は横濱岩龜樓の妓、本名ちる、江戸の醫太田某の女、安政の地震に家道衰へ、幼にして市に行商して父母に孝養し、終に吉原江戸町甲子屋に賣られた。初名子の日、龜遊と稱したのは横濱に行つてからである。米人某龜遊の容色を愛して之れを身請けせんとし、樓主亦切りに之れを強ひた。龜遊厭ふこと太だしく、遺書を裁し自刃して果てた。遺書の端に一首の和歌を添ふ、曰く

露をだに厭ふやまとの女郎花

降るアメリカに袖は濡さじ

叱り方 (楠正成)

昔、楠公兵士の誤なせしを叱るに、其者の以前善事のありしを敷へ上げて叱りしと也。たとへば兵士を叱るに、汝は何時ひるなき手柄をなし、かしこにては大功の立、又かくくの手立をなして大に味方の勝利を得、如此智有汝なるが故に、此度此役を申付しに、奈何なれば如、此のふるまひ、以前の功に可耻と云つて、暫時對面せざりしと也。……故に楠の兵卒叱られて主に背き他に走りしもの一人もなしと也。(三教童論)

名刀鬼丸由來 (粟田口國綱)

頃しも永久年間、後鳥羽法皇には、鎌倉の執權北條義時が陪臣の身を以て天下の政道を恣にし、朝廷を蔑ろにし奉るを憎し給ひ、北條家を誅戮し給はんとお思召しから、御所焼と云つて、全國の刀鍛冶を召し給ひ、お手づから刀劍を鍛へられました。此時に粟田口國綱と云ふ

刀鍛冶の名人があつたのを、上皇には御番鍛冶の中へ加へられました。然るに承久三年の御戦は京都方の敗北となつて、あらうことか一天萬乗の君は隱岐島へ御遷り遊ばされることに相成りました。此時六人のお番鍛冶共は殊寵を蒙つた陛下にお別れ申すに忍びず、俱にお供に加つて隱岐島へ渡つた、これで承久の亂は濟みましたが、北條三代の執權泰時は、御番鍛冶の中に粟田口國綱と云ふ名人が居ることを聞いて、遙に隱岐島まで使者を以て國綱を招び寄せやうと致した時、國綱は使者に向つて云ふには、

「有難き仰せには御座いますれど、某は陛下の御厚恩を蒙りましたる身で御座れば、北條家は我が爲めにも敵に當る道理、折角の仰せなれど陛下御在世中は、誓へ此の島の土となるとも、御仰せに従ふ譯には参り兼ねます。」

と、キツバリ断つてしまつた。使者の者は國綱の答を聞いて大に驚き、

「コリヤ國綱何を申す、其方は御番鍛冶と云ふ丈けで弓矢執る身でなければ、左様な無禮な事を申さずと、早々執權の御言葉に従ひ、鎌倉へ下るが宜からう。其方の身の出世にもなるこ

とぢや。」

「イエ、何と仰せられませうとも、此儀ばかりは強つてお断り申します。縦令一命を召されやうとも可厭で御座る。」

と、何うしても聞き入れません、使者は大に立腹して、當時飛ぶ鳥をも落とす執権殿の御命令に背く憎い奴、今に吠面搔くなど、息巻いて鎌倉へ歸り、此の趣を泰時に申上げた。流石は北條家第一の人物、國綱の言葉を聞いて感心し、

「ア、天晴なる國綱、武士にも劣らぬ忠義の魂、見上げたものである。」

と少しも咎めず、其の儘に捨て置きました、所が後鳥羽院には程なく彼の地で崩御まじく一周忌の御佛事も済んだので、茲に國綱は始めて隱岐の嶋を出立いたし、鎌倉へと下つて参りました、泰時は早速彼れを召出して、

「偕て國綱、先般の返答は、泰時ホトく感心いたした、最早其方も臣下としての忠義も相濟んだであらうから、何うか予の爲めに一口鍛へて貰ひ度いが、何うぢや。」

「ハツ、恐れ入りましたるお言葉、先般は上御心を察し参らせ、お断り申しましたが、何のお咎めもなきのみか、未熟なる某に再度までの仰せ、如何にも斯く云ふ國綱畢生の心を籠めて鍛へ上げ奉ります。」

「承知いたして呉れるとか。」

「ハツ………」

「過分に思ふぞ、然らば早速鍛へて呉れるやう。」

「畏り奉る。」

と、茲に國綱は泰時より特にお邸を給はり、籠を置いて、三七二十一日は沐浴齋戒いたし、首尾よく一刀を鍛へ上げて泰時に差出した。泰時鑄元より銚まで熟々見て、

「ア、天晴なるものだ、これより後は予の差料といたすであらう。」

「拙き出来にも拘らず、左様にまで仰せ下さるのは、國綱一代の名譽に存じます。」

「流石は院の御恩を思ひ、予の望みを斥けたる程の其の方、其の鍛石に等しき魂の籠つた此太

刀、長く子孫に傳へ、君に忠勤を怠らぬであらう。」

「恐れ入ります。」

「就ては禮心として何か遣はしたい、其方に望みがあれば申して宜からうぞ、泰時聽き届けて遣はす。」

「イエ別段望みとては御座いません。」

「イヤさう遠慮いたしては困る、何なりと申して見よ。」

「全く以てこれと云ふ望みの心も起りません。」

と云ふものだから、泰時

「然らば斯様致さう、此の禮心として良田三十町を遣はさう、何うぢや、夫れとも不足とあるか。」

「イエ何う仕りまして、決して左様の儀は御座いません。」

「然らば受けて呉れるやう、斯程の太刀只貰ひ置くと云ふも心苦しい……」

との仰せ、依て國綱も有難くお受け致しました。刀一本で良田三十町とは實に大したもの、御座います。斯くして暫く後のお話して御座いますが、如何なる次第か執權泰時が夜なく、物に驚はれます。初めの中は唯ウーム／＼と唸る丈で、宿直の家來が其聲を聞いて、

「モシ我が君、お目覺め遊ばせ、お目覺め遊ばせ。」

と、揺り起されて、ハツと夢から覺めると、身體はビツシヨリ、冷汗を掻いてゐる。

「如何遊ばしました。」

「ウム、予は何か申したか。」

「ハツ、大層お唸り遊ばした様で……」

「ア、左様か、夢を見て居つたのぢや。」

「如何なる夢で御座いますか。」

「左らばである、何時とはなしに予は名も知らぬ深山幽谷に踏み入り、方角さへも分らず、如何せんと思ふ折しも、我が前に一匹の鬼が現はれ、牙を鳴らし瓜を磨いで予を害せんとした

れば、己れ打取つて呉れんとすれど、身體の自由利かず、心のみ焦り居る所を、其方に揺り起されたのぢや。」

「左様で御座いますか、夢は五臓の疲れとやら申します。下郎共も左様な夢を見る事が御座います。」

「何時ぢや。」

「最早三更に御座います。」

「左様か、ア、退つてよからう。」

「然らばお休み遊ばされませ。」

と、退る、少時すると又魔される。「我が君、如何なされました、お目覺めを願ひます。」と呼び起されて、ハツト氣が付いて見ると前と同じ夢だ。これは不思議なこと、其夜は其儘寢すに明かして了つた。翌夜も鬼の夢を見る、又翌夜もと、斯様な事が五日ばかり續きました。

「聖人に夢なしと聞くが、見るにも事かへ、夜なく鬼に遇ふとは、將軍家の御依託にて、陛

下の人民を預る予が政道の正しからざるが爲めか、それとも我が徳の薄き故に神が鬼を遣はされて苛責遊ばすか、何にしても奇怪至極の事……」

と、流石の泰時も、甚くそれを心に病んで、日夜怏々として樂みません。家來の者も毎夜々々主人が鬼の夢を見て心を悩まされる様子だから、中には學者顔をして、

「左様に連夜同じ怪夢に魔はれ給ふと云ふのは、何か君の仁徳足らざる所あつてかと存じます。妖は徳に勝たずとやら、此の上とも御身を慎まれ、徳を積まれる様お心がけ遊ばされて然るべく存じまする。」

と、申上けると、泰時

「イヤ、予も最初は左様存じたが、不肖なれども泰時執權職を預つてより、一日として民を休め賑はさんことを忘れる暇とは無い、又我が身を顧みるも、行ひの素れありとは思はぬ、仰いで天に愧ぢず、俯して地に耻づるなき泰時が、斯く怪夢に悩まざるは、これは必ず他に何か謂れあるに相違ない。」

道理至極の言葉であるから、家來の者も反す言句もなく、其儘退ります、然し其の後とても相變らず斯様な怪しき夢のみ見ますから、泰時何思つたか家來を呼んで、

「コレ、其方寶藏に参り、先般國綱に命じて鍛えしめた彼の太刀、早々これへ持ち参れ。」
「畏り奉る。」

と、持つて参つたる太刀、泰時は平生の差料にしたいと思つて鍛たせたのであるが、餘り美事な出来であるから、其儘寶藏へ收めさせて置いたのであります、これを取出して其の夜は己れの臥床の枕元へ飾り立て、置きました。といふのは、國綱が精神を籠めて鍛ち上げた太刀だから、定めて妖怪等も太刀の勢ひに怖れて近附き得ぬであらうと思つたからであります、斯くて泰時は其夜寢に就きましたが、連夜夢に惱まされて充分に眠りを取り得ない疲れで、何時とはなしにウトウトとしたと思ふと、又もや何處よりともなく怖ろしき形相の鬼が、朦朧として泰時の枕邊に顯はれ出でた。泰時嚇として、「ヤア己れ妖怪變化、何なれば斯くも我れを惱まさんとするか、待てッ。」と攪みか、らうとすると、不意に枕元にて憂と云ふ異様の響、ハツと我

れに歸つて見れば、又もや怪夢に魘されたと見えて、身は臥床の外へ乗り出てる。

「ア、又も怪夢に惱まされたのであるか、それでは國綱の太刀も何の効もないと見える哩。」と、偶と見ると、宵に確に飾り立て、置いた太刀が、何時の間にか鞘を脱けて倒れてゐる。

泰時驚いて、熟々見れば、同じ枕元にあつた火鉢、其の三本の足には鬼の面を彫り附けてあつた、實に美事な出来榮だから、泰時は日頃から愛玩して居る、其の鬼の面の彫が、美事に二つに切り割られてありますから、二度喫驚して、泰時

「誰かある、参れ〜。」

「ハツ。」

お次の宿直して居た家來、又怪夢に惱まされ給うたるかと、早速夫れへ罷り出ると、

「予の眠り居る間に、誰か枕元へ参つてこれなる太刀を抜いたものがあるか。」

「イエ何う仕りました、決して左様な……」

「無いと申すか。」

「ハッ。」

「ウーム……流石は國綱天晴ぢや喃。」

と爲りて感心して居るが、家來には何が何だか解らない。

「ハッ、何と致しまして御座います。」

「フム、實は斯々にて、國綱自づと鞘を放れてあれなる火鉢の足に彫り付けた鬼の面を斬つ裂いたぞ。」

「エツ……」

家來は恐る／＼進んで見ると如何にも美事に切れて居ります。泰時は太刀を取り上げ、屹と有明の灯に改め見れど、又一つ毀れず、以前の儘の明晃々、實に嚴寒の氷を割つた如く、思はず襟を正させるばかりで御座ります。此の事あつて後は更に怪しき夢を見ません、依つて泰時はこれに「鬼丸」と命名け、北條代々の重器と致しましたが、其の後北條氏滅びて、鬼丸は新田義貞卿の手に入り、義貞卿越前足羽にて戦死の時、斯波家の重器となり、又足利家へ傳はり、

太閤殿下の手に傳はりました、所が太閤殿下は之れを京都の本阿彌光徳へ預けられ、慶長十九年大阪陣の時、本阿彌光室より徳川家康公へ差出しましたが、家康公は、「太閤の深き考へあつて其方へ預けたる太刀であれば、其儘大切に預り置くがよからう。」と、仰せられたので、其儘本阿彌家へ傳はりてありました、是が維新後遂に御物となつて我が皇室の護り刀となつたので御座います。(方樂齋橋南氏談)

豆腐汁 (西郷隆盛)

西郷隆盛が、弟の從道と同居してゐた頃のこと、或る朝急ぎの用でもあつたと見えて隆盛一人先きに御飯を食べて出かけた。從道は後れてお膳に向つた。お汁を吸うて見ると、鹽氣が少しもない、白湯に豆腐か何かを煮たのであつた。炊事の老婆を呼んで、これはどうしたのだ、と問ふと、初めて氣が付いた老婆は恐入つて、飛んだ粗相を致しました。急いだものだから、お忘れまして、と詫びた。が、ふと首を傾けて、「それにしてもお兄様が何とも仰しやらずに召

上つて行かれたのは合點が行きません。」と云ふ。從道、之れを聽いて、「あ、さうだつたか、兄貴は何も言はずに食べて行つたか、俺は連も兄貴には及ばない。」と言はれたさうだ。

六 無 翁 (橋 常樹)

橋常樹は土佐の國學者である。若年の頃江戸へ出て賀茂眞淵の門に學んだ。磊落不羈、事に拘らず、單身潔居して蕭散寡欲、聞識多しと雖も不知の如く、性酒を嗜めども飲まざるが如く、親しく近づく者あれども親みなきが如く、憂ひありと雖も憂ひとせず、樂みありと雖も樂とせず、家極めて貧なりと雖も貧とせず、依つて賀茂翁之れに六無翁の號を贈つた。その著す所の書、古今集仰古解二十卷、及び歌文詞の集若干卷等あつたが、曾て盜難に罹つて遂に一書をも遺さない。

一日酒を飲んで寢た儘、死んでしまつた。

賀茂翁の弔歌に曰

よの事は見ながら無しと見し人を

有りのすさみに問ふがかなしき

鶯も蛙も同じ歌仲間 (大屋裏住)

大屋裏住は、元白河侯の藩士で、久須美孫兵衛と稱した。仕を辭して江戸坂本町に住んでからは、白子屋孫左衛門と改名して唐更紗の製造を業とした。曾て白河侯の命を受けて、種々の更紗を製し、天井紙戸壁の張附疊の縁迄悉く更紗を以て張りつめ「更紗の間」といふ座敷を造つたこともあつた。

狂歌仲間の秋人が、或る時同じ仲間の空網に紹介を需めた。すると裏住は早速承知して自分は末廣大名に、秋人をば太郎冠者に扮せしめて、西ノ窪紙屋町なる空網の隠宅を訪うた。そして案内を請ふときから、言語動作悉く能狂言が、りで出た。空網もさるもの、之れに應じて初調の式を了へ、酒を酌んで別れたといふことである。

寛政元年の春、黃門定家卿、五百五十年忌に會し、全國の詩歌連俳に遊ぶ輩は、手向の吟を奉るべき旨堂上から江戸諸侯へ照會があつた。そこで菅江、空網、裏住等凡そ二十人、相談つて詠草を京都に送つたが何の沙汰もなかつた。

其後數年を経つてからのこと、或る時裏住本町の玉屋九兵衛の店頭で、世間話をして居る所へ、或る人が扇面を持つて來て一首書いて呉れといふ。そこで裏住前に京都へ送つた狂歌の中の一書を認めて渡すと、折柄店の前を通りかゝつた旅僧がふとそれを見て、不審の首を傾けながら、「失禮ぢやがこれは貴下のお詠みなつたものか。」と問ふので、さうだと答へると、旅僧大に驚き「拙僧數年前京都に寓居の折、定家卿廟前の遍額名歌三十六首の中に此歌あり、詠人不

知とあつたが、それは貴下であつたか」とて染筆を乞うて去つた。其歌は

蟹も蛙も同じ歌仲間
經讀むもあり只啼くもあり

といふのである。

松の葉の霜 (野村望東)

野村もとは福岡の人、剃髮して望東と號した。慶應元年夏、嫌疑を蒙つて捕縛せらるゝや浮雲のかゝるもよしや武夫の

日本心の數に入りなば

と詠じ、從容として獄に下つた。これは太宰府に謫居せる三條公以下の公卿に密謁した爲めであつたが、十月に至つて遂に博多灣頭の姫島へ流罪の身となつた。そして此配所に於て同志二十人の刑死したことを聞き、血を瀝いで般若心經を書寫し、
後れるて書くもかひなし法の文

よみかへり來む傳ならなくに

と詠んで之れを弔うた。

辭世に曰く

花浦の松の葉白くおく霜と

消ゆるはあはれ一さかり哉

志士の危難窮乏を救ふこと数を知らず、維新後旌忠祠に祀られ、明治卅四年十二月正五位を贈られた。

清 貧 (吉田空曇)

僕の吉助はもう我慢が仕切れなくなつた。絶食してから既に三日になるのである。主人の性質も十分知りぬいて居るから、大抵ならば言ひ度くないと思つたが、腹が空いてどうにもかうにもならなかつた。

「いかゞ致しませう、なんにも食べる物はありません……」
揉み手をしながら、恐るゝかう言つて主人の顔色を窺つた。主人の吉田空曇は、机に向つて本を讀んでゐるが、徐ろに吉助を顧みて、

「イヤ心配には及ばん、天は無祿の人を生ぜず、とある。俺が苦學をして世間に知られず、若しも餓死するやうなことがあれば、それも天命ぢや。お前は早く去つて他に主人を求めてお呉れ。俺と一しよに死んでもつまらんからな。」

吉助は聊かムツとした。

「先生御冗談仰有つちや困ります、手前が他に主人を求め位ならば何も申しません、ようがす、先生と御一緒に餓死でも何でもいたしませう。」

「さうか、これは有り難い。」

さう言つて、空曇はまた讀みさしの本を讀み續けた。吉助は決心はしたものの、踏みぬめる足にも力がなかつた。そして悄然として勝手の方へ退つた。併し、天はいつ迄も此主従を見棄ては置かなかつた。吉助が勝手の方へやつて來ると殆んで同時に、勝手口から商家の番頭らしい人が訪づれた。そして日外兒の病氣を診て頂いた御禮だと言つて、僅か斗りではあるが金を置いて歸つた。吉助は飛び上らん斗りに喜んだ。

「先生助かりました。これですく〜。」

と叫んで、お禮の金を示した。空曇の顔にも流石に喜色が浮んだ。

「お粥を煮るがい、お粥を。空腹の際に御飯を食べると毒だ。」

二人は久しぶりで兎も角もお粥にありついた。

そこへ又兩替屋某の番頭が訪ねて来た。そして先年急病に罹つた際先生のお陰で一名を取り留めた御禮に参つたと云つて、金二兩を贈り、猶今日は又是非先生にお願ひ申し度い事があつて伺つたといふ。

吉助との話を奥で聽いてゐた空曇は、聲を揚げて、「此方へお通し申せ。」と命じた。案内に依つて番頭の通つた室は空曇の書齋であつた。屏風も無ければ唐風もない、薬席を敷いた丈けで坐布團も無い。番頭は煩る面喰つた態であつたが、空曇の仗倆は信用してゐるので、實は手前の主人が重病で、多くの醫者の診療を受けたが、些しも快方に向はない。此上は先生を煩はす外はないと思つて、御願ひに罷り出たのであると申出でた。空曇夫れを聽いて、

「それは何でもないことぢやが、此程來絶食の状態で、只今漸く食を得た斗りぢや。着て出る物もござらぬので……」

といふ。然らばど番頭は、新衣一領を遣つて空曇の來診を請うた。偕空曇が兩替屋に赴いて主翁の病氣を診た上、一劑を投ずると殆んど奇蹟の如く忽ち快癒したので、大に之れを徳とし、爲めに新宅を築き、一生衣食を給した。

武 藏 塚 (宮本武藏)

宮本武藏は、劍道の達人で、二天一流兵法の元祖であるが、又諸藝に秀で、殊に書畫を能くし、彫刻鑄金また一種の妙趣を有し、毎に用ひた木刀は大抵自製のものであつた。

身長六尺、骨太く力業に越え、一生髮梳らず、入浴せず、壯年の時は髮が帶の邊まで垂れてゐたといふ。然して衣服は縞子の小袖に紅絹裏を着け、足の甲まで垂れる程の長いものを着てゐた。刀脇差などは木柄に赤金拵であつたが、在宿の時は無刀で五尺杖を携へてゐた。

遺言に依つて甲冑を帶し、六具を固めて入棺し、ハクタクニマツリ 飽田郡五丁手永弓塚村に葬つた。武藏塚といふのが夫れである。

ふかくさの里 (深草元政)

元政、俗姓は菅原氏、江州彦根、大夫石井半平の弟にて、射藝を能くし、十九歳の時出家す深草にて歌あり

すまでやは霞も霧も折々の

あはれこめたる深草の里

又、十二支を句の頭に置いて、鐘の銘を作る。赤坂圓通寺に在り。

嵐山流光人未驚 牛王出世振梵聲

虎狼野干氣經横 兎角方便誤群情

龍宮高處聲華鯨 蛇室睡破覺心生

馬腹忽變聖胎成 羊鹿牛車休復轟

猿啼霜降月色清 鷄人未唱客先行

狗不夜吠王舍城 猪觸金山轉峰嶮

月の終りは (大町桂月)

明治文壇に文名と共に酒豪の名を轟かした大町桂月は、晩年酒を廢して専ら書道に親んでゐたが、或る時人の短冊を請ひたるに

世を棄て、身はなきものと思へども

雪の降る日は寒くこそあれ

と、西行の歌を書き、其後に

花の咲く日は浮れこそすれ

と、芭蕉の句を添へ、さて、最後に、桂月自身の述懐なりとして

月の終りは困りこそすれ

通ひ猫（几帳）

基角の句に

京町の猫通ひけり揚屋町

といふのがある。これは紀國屋文左衛門の思ひ者となつた三浦屋の抱妓几帳が、日頃から大の猫好きで、一疋の黒い雄猫を飼ひ、客席へ侍る時も常に此猫を連れて歩いてゐたのを詠んだもので、京町は三浦屋のある處、揚屋町はお茶屋のあつた處である。

几帳は生粹の江戸ツ子で、而も武家育ちであつたから、張りも強ければ意地もあり、殊に古今の絶色と稱された名妓である。几帳まだ禿をつとめて居つた頃、朋輩の縁といふ禿が、姐女郎が馴染の客から貰つたといふ瑠璃の櫛を持つて來て誇り顔に見せた、几帳も子供心に羨しくなつて、欲しいものだと言つて口を迂らせると、縁は、これは仲々の高價のもので、禿風情の手に入

るものではないと云つた。それがぐつと癪に障つた几帳は、早速内所へ駆けつけ、無理を通しととう／＼瑠璃の櫛を購つて貰ひ、翌日縁の許に持つて行つて、これはお前が禿風情の持つてゐる物ではないと云つた瑠璃の櫛だけれど、こんな物は何でもない、廊下に投げ捨て踏み碎いて心意氣を見せ、縁の魂消るさまを見て喜んだと云ふ。

猶几帳の猫については面白い話がある。例の雄猫の黒は、几帳が廁に立つときは、必ずいつも後について來て、叱つても容易に去らない、そして廁の扉を閉めると外で頻りに鳴いて己まない、雄猫ではあり年も老つて居るので、薄氣味悪く思つて、人に頼んで捨てさせると、間もなく歸つて來ては不相變廁の外で鳴いてゐる。いよ／＼氣味悪くなつて、今度は遠くへ持つて行つて捨てさせた。

或る雨の降る淋しい夜、几帳が廁に立ちて、扉に手をかけ、半ば開いたところへ、一塊の黒い物が外から閃くが如く廁の中へ飛び込み、凄い眼を闇に光らせながら、猛り立つて唸つてゐるので、流石氣丈な几帳ではあるが、ままりの恐ろしさに腰も抜かさんばかりに驚いて、大聲を

擧げて人を呼んだ。男共何事の起りしかと駈けつけて灯の明りによく見れば、いつ歸つたものか彼の黒猫が、大きな蛇を咬へてゐるのであつた。そこで、これは屹度主思ひの猫が、前々から此蛇を見付けて几帳に危難あらせじと、斯くは荒々しく騒ぎ立て、鳴いたのであらうといふので、廓中の評判に上り、几帳も以前にまして此の猫を可愛がつたさうだ。

都の春も惜しけれど (侍従)

侍従は遠州池田の驛長湯谷某の女である。平宗盛の寵を蒙つて桂を焚き玉を炊ぐ身の上となつたが、心に故郷の父母を慕うて、寢食さへ進まない。會て宗盛と鞆を同じくして東山に遊び、花は綺陌に香ばしく、柳は綵樓に縁なる佳景に會うたが、侍従ひとり快々として樂まず、一首の和歌を詠じて曰く

いかにせん都の春も惜しけれど

馴れし東の花や散るらむ

と、宗盛之れを憐れんで、時々故山に父母を省みることを許した。

後ち平氏亡び、宗盛俘はれて鎌倉に押送さる、途中、池田に宿した時、侍従之れを慰めんとて、立つて舞ひ且つ歌うた。歌に曰く

東路の埴生の小家のいぶせきに

故郷いかに戀しかるらむ

牛を救ふ (清水正令妻)

清水上野介正令の妻は、膂力衆に勝れてゐた。或る日社に詣づる途中、米を負うた牛が、後脚を踏み外して將に斷崖に陥らんとしてゐた。牛童大に驚いて、荷物を卸ろさうとあせりけれども、牛は益々驚いて谷底へ陥ちさうなので手を出し兼ねてゐた。行路の人々も唯徒らに氣を揉むばかりで、どうすることも出来ない。見るに見兼ねた夫人は、徐かに輿から下りて、件の牛の傍らに歩み寄り、人々の危ぶむのを、平氣で牛の下腹に手を挿し入れ、荷物諸共差し上げ

て輕々と中路に救ひ出したので、見る者いづれも膽を潰さん斗りに驚いた。其子の左衛門尉も亦母に似て非常な膂力であつたさうだ。

山椒の辛き浮世 (路通)

△寢る胡蝶

「翁ひと、せ草津守山を過ぎて、松蔭に行きやすらふ、かたへを見れば色白き乞食の草枕涼しげに蕪はれやかにけやりて、高麗の茶碗のいとふるびたるに、瓜の皮拾ひ入れ、やれし扇に蠅追ながら、一ねぶり樂しめるあやしくて立どまり、さし寄り見れば、眼をひらき又ふさぎ、躬猶もとの如し、さは何もの、はふれにたる、おして名をきかまほしく、眼のさむるまで腰うちかけ

晝がほに晝寝しようもの床の山

折からの吟も此時なり、所は琵琶の海近く、比良のねおろし薫りくれば、並樹の古葉こぼれ

かゝりて、蟬の聲あたりをさらす、涼しとおもふほどに空たけたり、をのこすと起あがり、何夢や見つらん、膝をうちてひとり笑み居たるなほゆかし、松風聞了午眠濃とはさとれる人の口すさびなるを、今此人を見ることよと、こゝろおきせられ、近く寄りてしかくのあらましを問ふ、をのこいとをかしがりて、君の財を費すものは、劔の下に眼をふさぎ、親のたからを費すものは、松原に袖を乞ふと、われ其袖を乞ふものなり、只今出口の柳をくゞりて襟にひやりとさめたる夢は、鴉の糞にてありしものを、むかしを手枕にたのしむ身は、八珍の舌打より瓜の皮の蟻をはらひて、朝夕無味の禪にほこる、御坊もしらざるところなりと、白き齒をあらはして笑ふ、翁荷へる晝筭をひらきて、この飯のいと白う味ことにすぐれたるも、人の食を乞へるも同じ、われも亦乞食なり、たとへば柔なる褥にゆめ見、濃なる衣に身を包むとも、元よりわがものにあらざるをしらば、この松がねも、相同じくかつける薦もひとしからん、只元をしるとしらざると、實に見ると假に見ると、是を迷悟の二義ともいふ、をのこもし吾にしたがは、茶碗を旅籠屋の膳にかえ、薦をかり着の小袖にかえ、廓の夢を風雅にかえて、老の杖を

たすけば、樂又その中にあらん、をのこうなづきて翁にむかひ、其書筒を給はらんと、清水にひたしてこれを食ふ、首を叩いて曰、誠にこの飯五味を炊き、咽に甘露を通すが如し、實雪の日は寒くこそも、むまきはむまきに極りたれば、けふより御坊の言葉にそむかじ、さもあれむかし腰折をこのみて、三十一もじの數をもしる、御坊笑ひ給ひそとて、矢立を乞ひて扇にしろす、手拙なからず見えて

露と見るうき世を旅のま、ならば

いづこも草の枕ならまし

翁嘆じて云ふ、われ伊城に在しとき、洛の季吟立たる枕をた、き、敷島の道にいざなはれしが、今は俳諧の短きに遊びて、生涯の計とす、汝に路通の名を與へん、汝にわが頭陀をかくすことなし、日も暮れぬ、しりへにしたがひ來れと、夫より師弟のあはれみ深く、しばらく蕉門の人なりし」翁その時の句に曰ふ

起きよ〜わが友にせん寝る胡蝶

△破門を赦さる

路通「性不實輕薄終に師の命に違ひ、師弟の間絶えたり、然れど翁終焉の頃は其罪を許されたりとそ、飄泊の中俳諧の書を著はす、翁より膳所の曲水に與ふる書に

路通事大阪にて還俗いたしたりとの事其心ざし三年以前より見え來る事にて今更驚くには足らず、とても西行能因の眞似は成まじく候へば平生の人にて候、常の人が常の事をなすに何の不審が有べくや、拙者に於て不通仕る間敷候、俗になり候ても風雅の助けにもなり候はんは昔しの乞食よりは勝り可申候

二月十八日

ばせを

曲水様

是れ路通が初めて翁に見えし時、人の下に伏し居たるを思ひ合はせたるにて、又以て路通の人と爲りを窺ふに足るべし。」

△鬼貫の翁を救ふ

路通が何故に破門されたかは明かでないが、鬼貫の窮乏を救ふ爲めに、翁の偽筆を作つたことなども、同門の人々から排斥されるに至つた一の原因であるらしい。偽筆を作ることの善悪は言ふ迄もないが、併しその事情を聴けば、一概に排斥ばかりもされぬ同情すべき點がある。それはかうだ。「難波の濁江に咽渴し、短きあしの葉蔭にふしては、床に蓬はたのしめども、一女のやしなひこゝろの外に、今は鬼貫の名を隠し、朝夕の煙りをいとふ、昔しは花浴に遊吟して翁と畫讚の遊をもなせしが、其人は東西に錫をならし、吾はよしあしに身をひそめ、釜中の魚の水をしたゝめ、みなしろなして長物なければ、ともしびの陰に一通をしたゝめ、一貴一賤交を見るといふ、それもまづしきひがみといはん、きのふは門前に車馬をつなぎ、けふは雀の巢にあらされ、餌にあたふべき一粒もなく、今日にせまり候間自殺に及候、なき跡人をさはがせじと、この一條を残し候、御存の娘ひとり、鼻に木の實のきずもあらず、情ある人救ひとりて、若菜にあさらひの水を汲せ、雪には堀江の枯あしを折せて、薪水手のまゝに御遣ひ給はれかし、蓬生のひめとおとしめ玉ふなど、書きとめて稱名す、娘おどろきて及にすがり、やよ

やまち玉へ、われ死ん、いとけなくして母を見ず、父のふところに人となれり、われ聞く及は仇ありしときうらみを切る、このゆゑにこそ國をおさめ身を守る、日の本の寶とや、いまだきかず、貧にせまり子をたすけて、尊き父をころすものとは、よしなやなわれあれば、父のほだしいくほどぞ、又及に身をさくとも、父の貧父の愁かさぬる罪となる、ひたすら川竹の流に沈み、代をとりて孝にかへんとよ、となきて、聲をおします、時にあれたる戸を叩き、頭陀重杖を曳きて、久しく面せざる路通來る、親子あわて面をかへ、及を箱におさめながら、むすめはかたへにまぎれ入りぬ、鬼貫この事つゝ、むにしのびず、しかくの事を語れば、路通も雨のごとく涙を落し、人の行衛のはかなきを歎じ、鼻うちかみていへりけるは、死すべからず、べるべからず、父をすくひ子をすくふ、我にひとつの術ありと、鬼貫が耳に口をあはす、其のち鬼貫も幸ひを得て、賑々敷世を渡る、されどもしれる者はうき名をうたひ、路通は似筆の上手といはれて、社中の憤りを受けしとぞ、それから、路通攻撃の材料としては、義仲寺に於ける翁の法筵に、粟津の俠客を備ひ來つて、暴行を働かせんとしたことであるが、これとても同門

の人々が、すでに先師が破門を赦されたにも拘らず、どこ迄も之れを排斥せんとした無情に激したものと見られないことはない。

▲其角威を振ふ

「其角、翁の終りを見置き、初七日の法筵義仲寺に聚會す。大津の智月なさけある尼にて、路通が不興をふかく悲しみ、翁終焉ちかき頃いろ／＼と言葉をつくし、ゆるすの一言は得たれども、門人路通を疎すれば、この席に昇る事あたはず、寺の敷居も越えがたくて、智月乙州をもて連中をなだむ、其角答へけるは、路通が罪かろからず、されど此愁ひ時もことなり、碑前の焼香はゆるすべしとて、すけなく席にすゝめざれど、路通智月が後にしのびて、しほく／＼と席を過ぐるに、會筵の徒四十餘人、いづれも唾吐きて見むかず、路通憤りを押へかねて大津の俠客をかたらひ、此席をおかさんとす、其角文臺を踏越えて、十徳の袖高くまくりあけ、手に短剣をぬき拿ちて、俠客に立ちむかふ。支考、丈草袂にすがれば、酒堂、正秀俠客を防ぐ、其角聲調より發してひびき乳虎の如く、吾湖中に人となりて、今は天下の城府に家居す。抑

武城に日本橋あり、日本の人其橋を過ぎざるはなし、其橋を過ぐる者其角が名を知らざるはなし、やうやく大津壁の鼠穴にすみて、牛の涎に命を繫くさかやきの青瓜さね、剛に芽を出す二葉治郎は、是を俳諧にあはれといひ、削かけにはあくたいといふ、汝等去らすんば物見るべしといきほひ忠盛の子の如し、俠客腕のふときをさすり、我譽に罵りて去りしとぞ。」

路通に「芭蕉翁行狀記」外二三の編著あり、曾て陸奥に赴かんとせる時、翁草枕まことの花見しても來よ

の句を贈られた。

山椒の辛く皮利く淫世かな

いねく／＼と人に言はれて年の暮

等の句がある。浪華の人とのみ、詳しきことは傳はらない。「蕉門頭物語」に據る。

夢の浮橋 (山名氏清妻)

山名氏清の妻は、左近衛中將藤原保修の女である。夫氏清足利義満に叛いて大宮に戦死した時、夫人は和泉の堺に在りて其報に接し、更に其二子の脱走を聞いて大に嘆息し、「二子恥を知らず、妾豈に生を偷むに忍びんや」と言つて將に自刃せんとした。左右驚いて之れを抑止し、落髪を勧めたけれども頑として聞き入れない。そこで家來共は無理に夫人の手を取つて輿に抱き乗せ、土丸城に落ち延びんとして日根野に差しか、つた時、僕どもは餘りの疲勞に輿を松の根方に下ろして暫しと憩うた。其の際を見て夫人は輿の中で倅て覺悟の及に伏した。家來どもが唯ならぬ氣配に驚いて簾をあけて見ると、懐劍を以て喉を貫き、鮮血に染つて苦しんでゐる侍女等が水を灌ぎ藥を勧めやうとしたが、夫人は固く口を閉ぢ首を左右に振つて受けない。それを辛うじて服藥せしめ、輿を土丸城に入れたが、數日を経て根來に遷した。前に戰場を脱れた二子が此由を傳聞し、忍んで根來に來り母に面會を求めたけれども、母は斷然之れを拒んで近づけない。

「武士の家に生れて勇なきは士にあらず、人の子にして孝あらざるは子にあらず、爾曹將家に

人となりて齡既に弱冠を超えながら父の難に殉する能はず、何の顔ありてか來り見えんとする。熙氏(第三子)は幼なりと雖もなほよく父に従ひて死せり、爾曹何が故に死せざるか。」と、衣を被つた儘伏して一言も發しない。二子も深く愧ぢ、涙を揮うて其場を去つた。二子の去つた後で、夫人は夫か出陣の際寄せた手紙を取出し

取りえずば消えぬと思へ梓弓

引いてかへらぬみちしばの露

とある辭世の奥に

沈むとも同じく越えむ待てしばし

苦しき海の夢のうき橋

と、一首の歌を書き留めて死んだ。

小萩がもとの秋風

(鳥井兵庫助)

天正元年八月、鳥井與七郎は主君義景に従つて織田信長の兵と戦ひ、義景に殉じて刀根山に戦死を遂げた。與七郎の父兵庫助、一子與七郎の死を聞き、

先き立ちし小萩がもとの秋風や

残るさえだの露ぞ添ふらむ

と、詠み、己れも花々しき働きをして、やがで我子の跡を追うた。

復讐 (津田八彌の許婚勝子)

勝子は京都生れの窈窕たる美人で、織田信行の侍女であつた。信行が岩倉の城に在りし頃、其家來に津田八彌といふものがあつて、これがまた花の枝からこぼれるやうな美男であつた。八彌はもと去る農家の子であつたが、信行に擡んでられて士班に列し、才子として家中の評判もよく、主君の寵遇も甚だ渥かつた。一方には八彌、一方には勝子、唯もう繪そら、どもに見るやうな美男と美女とが、同じ家中に顔を合はせたのであるから、何か一騷動なくてはなら

ぬ。縦令、二人の間に何等の關係が無かつたとしても、人間といふ奴は却々好奇心の發達した動物であるから、第一其周圍が捨て、置かぬ。何のかのとうるさい取沙汰があつたものと見え、粹な信行が二人の仲を取りもつて、改めて結婚の約束をさせた。

ところが同じ家中にひとり私かに津田の出世を喜ばぬものがあつた。それは信長附屬の老臣左久間七郎左衛門といふ名からして鬚武者の敵役らしい男であつた。左久間は津田が百姓の子から出世して信行の執事となり、大した戦場の功もないのに、自分と肩を並べるに至つたのをひどく嫉んでゐた。

此處戯作者の眼には、何うしても勝子に對する戀が、津田を殺害すべく、佐久間の決心を早めた動搖として映じなければならぬ處である。佐久間が豫て勝子に戀ひ焦れて居たといふのが事實かどうかは知らないが、佐久間にとつては八彌の幸福が癪の種であつた。

佐久間は遂に八彌暗殺の意を決した。或る冬の夜であつた、彼は屈強の侍、數名に機密を授けて津田の家を襲撃せしめた。津田の美しい體軀は膾のやうに斬り苛まれて灰燼の中に横はつ

て居た。其死骸の傍に落ち散つて居た短刀によつて、此兇行が家老佐久間の所爲であると判明した頃には、彼は早くも風を喰つて美濃稻葉の齋藤道三が許に身を寄せて居た。

勝子は泣いた、憤つた、さうしてそれが夢ではないかと訝んでも見た。その希望があまりに美しかつただけに、その結果も亦あまりに悲惨であつた。悲歎と絶望との極、彼女は竟に凛たる一固の女丈夫となつて生れ變つた。彼女は其許婚の夫の爲めに復讐の意を決した。彼女の主君信行は彼女の爲めに正宗の名刀をはなむけした。

彼女は其姿を變へて、美濃國に赴き、稻葉なる叔父のもとに身を寄せて、ひそかに復讐の機會を窺つて居た。彼女は或日道三の孫龍興の鷹野の歸途を要し、京の田舎から奉公に出た者と詐つて運よく道三夫人の侍女に用ひられる事となつた。亡き夫の恨みを晴らしたいといふ一念が凝つての奉公であるから、勝子の忠勤は程なく夫人の意にかなひ、新參ながら重く用ひられてその側を去らず侍する身とはなつた。

さて其年も暮れて翌年の春となつた、稻葉の城中には騎射の催しがあつた、かの佐久間七郎左衛門も其選手の一人に擧げられた。それと聞いた勝子は天にも昇る心地、雀躍して喜んだ。勝子は先づ夫人に請うた。

「妾身卑賤にして未だ騎射を見ず、願はくば御共の中にありて、其盛儀を拜觀することを得んか。」

と。夫人も氣に入りの勝子のいふ事であるから快くそれを許諾した。さていよいよ當日となると、十五人の選手が武裝華やかに打扮つて箭を負ひ弓を横たへ、駒を進めて簾前に一揖し、勇ましく名乗りを揚げる。

十五番目に佐久間七郎左衛門が駒を進めて簾前に一揖せんとする刹那、勝子やにはに簾中を跳り出し、匕首を揮つて七郎左衛門を刺し、大音に名乗りを上げた。

「妾は津田八彌の妻なり、亡夫の讐、佐久間七郎左衛門思ひ知れ。」と力にまかせて腹を剔る。剛勇無双の七郎も、不意の一撃にアツと一聲叫んだまゝ、聲に應じて倒れたが、脆くも其まゝ、悶絶した。ソ、いといふので警固の侍が駈けつけて勝子を取押へる。やがて道三父子の鞠間に應

じ、勝子は岩倉に於ける佐久間の兇行を逐一具狀に及んだ。道三父子を始めとして並居る武士何れも勝子の貞烈に動かされざるはなかつた。道三徐ろにいふやう

「可憐の女、貞烈感するに餘りありと雖も、信長に對する誼を如何せむ。且つ一婦人の爲めに良士を殺すは我の恥辱とする所なり、義止むを得ず。」

と、あはや勝子は其まゝ、獄に投ぜられんとした。これによつて見ると戰國時代は、必ずしも事の理非曲直を問はず、専ら實力を尙んだものと見える。道三が一婦人の爲めに良士を殺すは我の恥辱なりというたのは、戰國時代をよく説明した語として味ふ可きである。

龍興夫人は氣に入りの勝子の素性を知つて、大に其志を憐むと同時に、深く其勇氣に感じた。其處で道三に乞うて勝子を申受け、一夜の警衛を托された。

其夜夫人は勝子を召して厚く其志を賞し、若干の金を與へて落さうとするけれども、勝子は難の夫人に及ぶべきをいひ、固く辭して受けない。而も再三のすゝめ點止難きに及び、勝子は涙を呑んで夫人に別れを告げ、岡崎に走つて大須賀康高の許に身を寄せた。

此噂を聞いた徳川家康は、いたく其貞烈に感じ、城中に召して保護を加ふること數ヶ月の久しきに亘つた。七郎左衛門の兄、佐久間盛政は、勝子が岡崎の城中に置まはれて居る事を聞き信長に因つて勝子引渡しを交渉を歎請するに至つた。

勝子の一件は端なくも織田、徳川兩家の重要なる外交問題となつて現はれた。信長は其の宿將佐久間盛政の歎請を容れ、池田信輝を使者として家康に對し勝子の引渡しを要求したけれども、家康は頑として之に應じなかつた。

「勝子は稀世の烈婦なり、假令婚媾の親を絶つとも、我に依りて來るもの、我これを放ち遣るに忍びず。」

と、あつて、信長は見事に其要求を撥ねつけられた。血氣の盛政は外交の結果を待つに忍びず自ら二人の刺客を派して勝子の外出を窺ひ、岡崎の郊外に要して勝子の轎を襲撃せしめた。

二人の刺客は、巧みに其機會を捉へたけれども、勝子を護衛してゐた三河武士の手並に敵せず、反つて岡崎の捕虜となつた。家康は一應鞫問の後、其狀を審にして之を馘り、遠州の見

附驛に巢した。信長は此報に接して大に悲り、兩國將に干戈を交へんとするに至つた。勝子は之を聞いて大に驚き

「妾一人の爲めに兩國難を構ふるに至らんか嘗に君の鴻恩に背くのみならず、妾が宿志とする所にも悖れり。」

と、過去の鴻恩を謝する旨の一書を遺し、潔く自盡した。家康は深く其貞烈を稱し、命じて厚く葬らしめたといふ。(白柳秀湖氏「大日本閩門史」より)

ならびの岡 (吉田兼好)

「徒然草」の著者として有名な吉田兼好は、後宇多帝に仕へて左兵衛尉となり、稍々親昵せられたが、帝の崩御に遭うて髪を削り、修學院に入つた。後ち木曾に遊んで其の山水を愛し、霧原山に廬を結んでゐたが、一日國守衆を率ひて其地に獵し、頗る喧擾を極めたので此處もまた浮世なりけり餘所ながら

思ひしまゝの山里もかな

と詠じて故郷へ歸つてしまつた。

嘗て葬地を京都雙岡に卜して櫻花を樹る、和歌を詠じて曰く

契りおく花と雙の岡の上に

あはれ幾世の春を過ぐさん

其面に唾せん (鷲尾隆聚)

鷲尾隆聚は右近衛中將鷲尾隆賢の第二子、資性豪放狷介にして夙に勤王討幕の志を抱く。維新の大業に參與して功あり、伯爵に叙せらる。隆聚奇骨ありて容易に人に下らず、又惡を疾むこと蛇蝎の如し。晩年落魄負債山積す。蓋し性恬淡清白理財に短なるが故に、屢次奸人の乗ずる所となつたのである。一日東久世通禧、隆聚に貴族院議員たらんことを勧めた。隆聚冷笑して曰く、今政治に通ぜずして唯二千圓の歳費を得んが爲めに貴族院に入らんとする者あらば

余は其面に唾せんと欲す、余縱令餓死すと雖も豈此陋態を學ぶべけんや、と。隆聚又大に角力伎を好み、相撲道の興隆に與つて力ありと云ふ。

よしなき雲 (鳥井與七郎妻)

鳥井與七郎の妻は、川合安藝守の女で、世に勝れた美人であつた。與七郎に嫁いで未だ半歳ならざるに織田方との戦ひ起り、夫は戦場の露と消え、己れは俘はれの身となつて、名もなき雑兵の辱めを受けんとしたが、危く虎口を免れ

世を経なばよしなき雲も覆ひなむ

いざ入りてまし山の端の月

といふ辭世を遺し、身を井戸に投じて亡き夫の跡を追うた。

下喬木入幽谷 (白石、鳩巢)

新井白石も若い時には俳諧を好みて随分よく詠んだといふ事は、室鳩巢が金澤の友人青地澂新に書贈つた書翰に見えてゐる。此書翰は集めて「兼山麗澤祕策」と題して希に傳つてゐる。今は鳩巢の原文のまゝを抄出して見やう。

新井氏も若き時俳諧を好み、随分よく被致候て、桃青など、せり合被申候由、桃青も奇人にて、李曰を學び候て桃青とつけ申候由に御座候、只今世に板行の内に、新井氏の句多、出申由に候、かくし名桐陰と申候、桐陰と之有は新井氏にて候よし被申候、或時孟子の出ニ幽谷一遷ニ喬木一の章をよみ候て、忽に前非を悔申候て、俳諧をやめ申候、學者は詩文など工夫仕筈に候、夫に俳諧を好み候は下ニ喬木一入ニ幽谷一と申ものにて候、近頃梁田才右衛門あれ程の詩才にて、俳諧好候旨、承候、此は下ニ喬木一入ニ幽谷一と存候、果して此程逐電致し候由申候、新井氏へ昔の俳諧覺被申句之有候は、承度と申候へば、白炭の發句に

白炭や朝霜消えて馬の骨

又、玉子の發句に

いで王子絲でひぼとく水仙花

此句など人々ほめ申候、或人見物場へ参候て、下結ぬすまれ候ものに、下結を贈り申すとて、狂歌よみ遣申候

もちはる、身をばおもはずぬすまれし

人の下結のをしくもあるかな

かやうの儀ドン／＼と咄候て被致大笑候、傍に無人様に見え申候、此人の氣象に似申ものも無之候、此氣象にて學に入被申候事、難得物と存候、日氣象の弊は今に之有候様に奉存候

白石の俳句の逸事は此書を原據とす。梁田才右衛門は明石の蛻巖なり、詩に於ては日本の大家の一人、その人の俳句は未だ見及ばず、斯道の先生の探討を煩したしとおもふ、蛻巖の逐電を俳句の罪に歸したるは、鳩巢が俳味なきが爲めのみ、論ずるに及ばず、さても白石の桐陰としての句、此に二句を存するのみ、もし當時板行の句集に、桐陰の名存するものあらば、白石

の句の天地間に留まるもの此二句には止まらざらん、其集の名を斯道の先生達に垂教を乞ふ

(萩野由之博士)

心にまかす浮雲 (坦山)

坦山は、磐城國平の藩士新井勇輔の長男で、二十歳の時榮禪に於て薙染し、初めは回天に字治の興聖に参し、後ち風外に大阪の烏鵲樓に侍してその印證を受けた。

曾て二條家の祈願所たる京都白川の心性寺に住したことがある。其の關係で關白二條公と相親昵することを得たが、磊落にして眼中權貴なき坦山のことだから、或る時、時事を論じて大に二條公を罵倒した。公の太夫某なる者坦山の爲人を知り、舌禍を買はんことを患ひて、氣轉を利かし、狂を發したと稱して清水の顛狂院に送り、關東の法類を招いて之れに托した。

護送されて大津に到つて始めて自由の身となつた坦山は、雲を詠するの詩歌おの／＼一首を書して之れを二條公に寄せた。爾來自ら狂翁と號し、迹を水雲に托するに至つたのである。

二條公に寄せた詠雲の詩歌は左の如くである。

蓋覆乾坤一笑女媧。或昇山岳或泥沙
隨風隨處無常態。時起甘霖利國家
あまつそら心にまかす浮雲の
風のいづこに吹きさそふらむ

深き淵瀬 (奈良義成の妹)

三好氏の臣奈良義成は、笛を貞光久左衛門に學んだ。或時久左衛門から、義成の妹を妻に迎へたいといふ申込みに接した。久左衛門には其時既に妻があつた。勿論それは離別するといふのであつた、けれども物堅い義成はそれに従はなかつた。そして間もなく妹には許婚の夫を定めた。久左衛門は深く夫れを恨みに思ひ、永祿十二年正月の本國寺合戦に於て、義成を打ち果たしてしまつた。此事誰言ふとなく世上の取沙汰となり、久左衛門の門にはこんな張札を

さへ見るに至つた。

いましめの爲めとやいはん貞光が

弟子ののど笛か、んとすらむ

貞光が笛をもうそに吹きかへつ

蜂のさすほど人のわらへば

久左は益々意地になつた。そして義成の妹を奪ひ取つて一室に監禁し、飽迄己が意に従はしめんとした。そこで女は一策を案じ、甘言を以て久左の意を安んぜしめ、伏見なる母に一書を贈りて事の顛末を告げ、自殺の覺悟を示して

思ひ川深き淵瀬は早けれど

さそふ水には名を流さめや

といふ一首を書き添へた。母は讀み了つて、匕首を喉に突き立て、失せた。さて女は、久左の油断を見すましてその佩刀を抜いて一思ひに之れを刺殺ろし、己れも亦反す刀で腹を割いて死

んだ。

世見の小川 (石川丈山)

石川丈山、武門を離れてからは、日技の山籠一乗寺村に世を避け、詩仙堂を創し、自ら六々山人と號して山水花月に情を慰めた。詩仙堂と稱したのは、唐宋諸名家三十六人の詩を一首づゝ自書し、像は狩野探幽に畫かしめて梁上に掲げたからである。蓋し本朝の三十六歌仙に準うたのであらう。茲に隠れてからは、一度も京へ出ようとしなかつた。後水尾帝丈山の風流を聞召されて、これを召されたが、固く辭し奉りて

渡らじな世見の小川の淺くとも

老の浪たつ影ははづかし

と申し上げた。帝も其心を憐れに思召されて、然らば思ふが儘にせよとの勅あり、且つ其歌の「浪たつ」を「浪そふ」と雌黄を加へ給うた

右 左 (文晁、北馬)

ある夏の夕方であつた。

文晁は直ぐ自分の裏手に當る對馬守の邸へ、席畫に聘せられての歸路、ほろ酔ひの快い曖を洩らし乍ら、迎への駕籠を呼び寄せず、獨りぶらりと徒歩で、夕方の涼風を浴び乍ら歩いて来た。

對馬守の邸から三味線堀を通つて、二長町の自宅へ差蒐らうとする路次へ曲ると、彼は酔興にもつかくと北馬の假住居へ立寄らうと、遊戯的な氣分に襲はれた。

「御免よ、北馬はゐるかえ。」

と無遠慮に、格子戸を明けるとつかくと上框へ上り込んだ。

「ゐるが、誰だ。」

といふ粗末な返事は、全く暮れ切らない奥の間の蚊遣火の煙の底から聞えて來るのであつた。

「俺だよ。」

と文晁は、尙ほも不鮮明な返事をして這入り込んだ。彼の心は酔ひの爲めに聊か悪戯的な心持が流れてゐた。

「俺つて誰だい。」

「俺だよ。」

「あゝ、これア先生でしたか、飛んでもない處へ、能くこそさアどうぞ。」

「はゝゝゝ。何に、开座に慌てなくとも好いぜ。おや、お前さんは左利きかえ。」

「へえ、これア飛んでもない處を見られやしたねえ。」

臙氣な蠟燭の光で照された彼の諸肌脱ぎの姿は、更に左利きの奇蹟に依つて、文晁の心を一層好奇的に咬るのであつた。

「左利きとは今迄氣が付かなかつたが、それにしても、俺の宅では確かに普通の通り右で書いてゐたと思ふが、一體、お前さんは兩利なのかえ。」

「どうも、然う開き直つて聞かれますと、白狀致しますが、實はこれには斯ういふ譯がありませんので。」

と、北馬は肌を納めると、居住るを直し乍ら、斯う語り出した。

「實は、俺も初めから左利きではございませんでしたが、右の手は小梅の先生に教つたのですから、先生の仕事の外は使ひ度くないので、で、貴方にはまア後から教を願つたのですから、左を使ひ度いと、斯う思ひまして。」

「ふむ、成る程、それア奇特な心懸けだね、どうも、恐れ入つたものだ。」

「へえ、最初は却々巧く行かなかつたが、段々馴れるにつれて、今では何の苦もございませんのですよ。」

「然うかえ、开座考でお前さんが、手の使ひ分けをなさるとは、全く感心なことだ。俺も澤山弟子を持つてゐるが、お前さんのやうな奇特な心懸けの者は一人もゐないぜ。」

「どうも恐れ入ります。何にね、小梅の先生にも濟まないし、又、貴方にも濟まないし、兩先

生へ義理を立てたいと思へば、仕うしても兩手を使はなければなりませんから、まア俺の心丈
けを擲んで下されば、それで満足でございますよ。」

「そうかえ。それア何しろ感心なことだ。」

文晁は北馬の斯うした奇特な心懸を痛く感心して、北齋にもこの事を語ると、彼も非常に感
じ入つて、益々北馬の爲めに、この兩巨工は力を添へることになつた。

北馬は、山の手の同心有阪五郎八の長男であつたが、性來鹿爪らしい役人氣質は大の嫌ひで
好きな畫筆の自由な天地に悠々自適することを望んで、弟に家督を譲ると、北齋の弟子となつ
たのであるが、その才筆を見込んだ文晁が、北齋に話して其の門弟とし、極彩色を要する緻密
な繪などは、大體の構圖は勿論自分でしたが、故實の詮議や、細かい模様などいふものは一切
北馬の丹念な筆に委せたのであつた。(歌川飛鳥氏「名人物語」より)

一首の詩をも録せず (朱舜水)

水戸の朱舜水は、明人でありながら詩を作ること好まず、常に人に語つて曰く、「詩を吟じ
たり賦を作つたすることは、學問といふものではない。「空梁落燕泥」工は則ち工であるが
何等治理に益する所が無い。「僧推月下門」麩は則ち麩であるか、何等民事に補ふ所が無い。「鷄
聲茅店月、人跡板橋霜」新は則ち新であるが、何等事機に當る所が無い」と。是れ即ち朱舜水
文集中、一首の詩をも録せぬ所以であつた。

死別兼生別 (梅田雲濱)

天の戸をおしあけ方の雲間より

照らす日影の曇らずもがな

と詠じて同志を糾合し、尊王攘夷の急先鋒として活動した梅田雲濱は、病中幕吏の襲ふところ
となるや、筆を執つてつ壁に題して曰く

妻臥病牀兒呼飢 一身直欲拂戎夷

今朝死別兼生別 唯有皇天后土知

と。(此詩或曰) 身在病體兒叫飢 此心直欲掃戎夷 如今死別兼生別 只有皇天后土知) 斯くて獄に投ぜられたが、獄中又詠じて曰く

君が代をおもふ心の一寸に

わが身ありとは思はざりけり

終に小倉藩邸の獄舎に於て鬼籍に入つた。享年四十四歳。

眞 贋 (西郷菊次郎)

西郷菊次郎が、京都市長をしてゐた時、南洲翁の何回忌とか、行はれて、翁の遺墨展覧會が開かれた。つまり南洲の眞蹟を秘藏してゐるといふ連中の鼻較らべが催された譯である。西郷市長も其會に臨んだが、終始一語も發せられなかつた。そこで人々不思議に思ひ、取圍んで鑑定を請はんと迫まつた。市長甚だ迷惑さうな顔をして曰く、私は幼にして父に別れ、その筆蹟

を知るよしもなかつた。但聞く所に據ると、父は詩書共に趣味を有つてゐたけれども、何分國家多事の際とて、東奔西走席暖まる邊なく、殊にかうして祭られるやうなものを書くことは好まなかつたから、掛け物になるやうなものはさう澤山書いてないと思はれる、尤も餘儀なく頼まれた場合は、書生に代筆を命じたこともあつた。私には一向解らないが、却つて皆様には眞蹟が解つて居られませう、と笑はれた。

利 か め 目 薬 (久保田米僊)

久保田米僊、或る時平素昵懇な鑑識天狗某を訪づれた。某は、よい處へ來て呉れた、實は此の度唐畫の傑作を數幅手に入れたから觀て貰ひ度いと思つてゐたところだ、と言つて早速取り披けたのを見ると、よくある例の模寫物なので、米僊一見して眉を擧めたが、それとは氣付かぬ某は「いづれも無落款だか、顔輝か、いづれにしても稀世の珍品だらう」と、しきりに鼻を蠢めかしてゐた。すると、米僊どう思つたか、急に態度を改めて「なるほどこれは珍品」と、取

つてつけたやうな挨拶をすると、「君もなか／＼見える哩、併し筆者は實際誰だらうか、君に解れば箱書を願ひたいものだ」と來たので、「これ程はつきりしたものを解らぬ畫家もあるまいによし箱書をしてやらう」と、筆を揮つて黒痕淋漓、一々箱に書きつけた。曰く「丸黒子筆、墨畫胡椒點山水圖、一ぶく」「丹反魂筆、萬壽山銀寺圖、一ぶく」「命散蘇筆、木皮山草根寺、一ぶく」

「何だか、聞いたやうな名だが……」

某は小首を傾ける。

「これはいづれも越の富山縣の産で有名なものです。」

など、フザケながら、米僊は何喰はぬ顔である。

「越の何時頃の人です。」

「中世ですよ。」

「君はしよつちう書物に眼をさらしてゐるから、なかく精しい。」

某はまだ氣がつかない。流石に米僊も齒痒がり

「眼のことで思ひ出したが、越中富山の賣藥は、贅六の眼病には何の利目もありませんね。」

と、際どいことを言ひ出しても「誰が目が悪いので」と、感じの悪いこと夥しい。米僊も往生して

「イヤ、悪いの、悪くないのつて、からつきり見えないのだねえ。見る事は見えるが鉛がブラチナに見えるらしい。」

これでもかと、鋭くつき込んだが、「何のことです。」と、きよんとしてゐる。米僊呆れ返つて

「薬も餘り利かな過ぎると、却つてこちらがあてられますよ。」

劫

(大石正己、尾崎行雄)

大石正己と尾崎行雄とか對局した。そして劫が出来ると、彼一石と取れば、此亦一石を取り

て、また他に及ばない。忽ちにして各々の持石は皆取り盡されたので、交渉の結果石を交換して、更に又之れを繰返し、數回やつたが果てしがない。茲に於てか流石天狗の兩人も互に我を折り、「勝敗無し」と言ふことにして別れた。が、別れに在んでの言草が面白い。「思ふにこれは斯界の新例であらう。」

蜜柑船 (紀國屋文左衛門)

沖の暗いのに白帆が見える。

あれは紀の國蜜柑船

蜜柑船の冒險が圖に當り、一舉にして巨萬の富を贏得た紀國屋久左衛門は、尋で鹽鮭の賣買に依つて巨利を博し、一日慨然として曰く、男兒七尺爲すなくんば即ち己む、苟も爲すあらば豈に一郷の善人となりて止むべけんや、と。江戸八丁堀に第を構へ、盛んに客を遇した。凡そ文左衛門を頼り來る者は、その何人たるを問はず、泥棒を上客とし、酒を好んで家業を治めず

色を漁りて父母を養はざる者を次席とし、詐欺を働いて刑餘の身となつた者を三席とするといふ有様だつたので、一時文左衛門の邸は、諸國のあふれ者の合宿所たる觀があつた。

曾て一食客があつた。飽食して終日眠り、唯日に一度屋に上つて四方を望見するのみで、他に何事をもしないので、流石にならず者の集りでも、こんな役に立たぬ者は仕様あるまいといつて、文左に此事を告げた。けれども文左は、一向取り合はず却つて其客を厚遇した。斯の如きこと月餘、一日其客倉皇しく文左を促して、與に俱に屋上に登つた。そして西の方の天を指して、「ア、ハ、紅い雲が見えるか」と問うた。指す方の天には、衣のやうな紅雲が横つてゐた。「此處十日を出でずして江戸に大火がある早く用意なさるがい、」と、かう言つて客は屋上を下つた。文左は何か心に領いてゐたが、それから一層其客を厚遇した。

そんなことがあつてから四五日も経たないうちに、本郷丸山に火事が起つた。すると文左は遽に下女下男に命じて、或は家具を運搬せしめ、土藏を封鎖せしめるなど恰も近火のやうな大騒ぎをやつた。家人は之れを見て、氣でも狂つたのではないかと笑つたが、兎角する間に風

が益々強くなつて、火は四方八方に飛び擴まり、とう／＼江戸市中が火の海と化したやうな大火となつてしまつた。之れを見た文左は、家事の一切を家主に托して直ちに旅装を整へ僕一人を伴ひ、輿を飛ばして木曾に馳せ、晝夜兼行三日にして目的地に到着した。そして一農家に投宿した。丁度其時農家の子供が、屋外で遊んでゐた。文左はそれを呼んで、何もお土産を持つて来なかつたからと云つて、小判に穴を穿つて紙燃を通して之れに與へた。これが近村の大評判となつた。機を見て文左は附近の山林を悉く買占める交渉を始めた。小判に氣を呑まれた人々は、一も二もなく之れに應じた。それを片つ端から伐り始めた頃、江戸から多數の材木屋が殺到した。けれども其の附近は最早や悉く紀國屋の物になつてゐた。文左は忽ちにして驚くべき巨利を占めることが出来た。

おこしたきもの (狂歌堂眞顔)

狂歌堂眞顔、姓は北川、通稱嘉兵衛、戀川好町、四方歌垣、俳諧歌場などいふ別號があつた

初め戀川春町を師として著作を爲したが、世に行はれない。依つて之れを廢して後ち蜀山人に就て狂歌を學び、遂に四方の姓と共に判者の免許を受けて狂歌堂眞顔と改めた。

俳諧歌の中興を志し、一と年京師に登り、傳手を求めて芝山持豊卿、富小路直貞卿などへ伺候した。折ふし歌の會があつて「埋火」といふ題が出たので、眞顔とりあへず

御袖にすがりてなりと埋火の

俳諧歌はおこしたきもの

と詠んだ。此歌が雲のかけはしとなつて、遂に文政十一年五月二條家から宗匠の號を免許せられ、文政調俳諧歌中興の祖として名聲を轟かすに至つた。

落 款 (文晁、馬琴、一蝶、光琳)

谷文晁は、貧乏してゐる門弟の描いた物には、さつさと自分の印判を捺してやつた。そしてこれで間違へられるやうでは、おれの畫も仕方がないのだからなど言つてゐたさうだ。曲亭馬

琴は、或夜途上で拾つた「乾坤一艸亭」の銅印を用ひ、又英一蝶は、藥國球、君受、藥君受氏、北窓中隠などの支那人の印を獲て、其儘己が印に用ひ、落款に捺してゐたし、光琳は死に臨んで一切の印を門人に附與してしまつた。

おぼろ月 (西郷吾涼)

相州浦賀の人、十二歳の時痘疹を患うて明を失ひ、鍼醫を業とし、初めは松意と號し、後ち陶意と改めた。性頗る頑固で我が強く、人と議論をして屈したことがない。が、また記憶絶倫で、奇才にも富んでゐた。好んで張仲景、孫思邈二家の醫書を誦誦し、人の疑義を問ふ者あれば、一々其出處、部門、行數を答へて差つたことがない。又常に石井士口、澁谷杞柳等と將棋を闘はせたが、數日を経てから前日の駒の配置を繰返して過つたことがなかつた。越谷吾山を師として俳句を學び、

おぼろ月しばらくありて船の數

おもむろに若葉の中を白帆かな
等の句がある。

しつべい張競 (諏訪越中)

孰れが前に出來たか、穿鑿に及ばぬが、怪力の盲人の物語りが二つある。同じ話の型變つて一ツは、講釋師が板にかけて、のんくづいくと顯はす。一ツは好事家の隨筆に物凄くも又恐ろしく記される。淺く案ずるに、此の隨筆から取つて講釋に仕組んで演ずるのであらうと思ふが、書いた方を讀むと嘘らしいが魅せられて事實に聞こえる。それから講釋の方を見ると、真らしいけれども考へさせず直に嘘だと分る。最も上手が演ずるのを聞いたら、話の呼吸と、聲の調子で、客をうまく引入れるかも知れぬが、こゝでは隨筆に文章で書いたのと、筆記本に言語のまゝ記したものとを比較して、おなじ言葉ながら、其の力が文字に映じて、如何に相違があるかを御覽に入れやう。一ツは武勇談で、一つは怪談。

先づ講釋筆記の武勇談の方から一寸抜き取る。——最も略筋、あとで物語の主題とも言ふべき處を較べて見ませう。

で、主題と云ふのは、其の怪力の按摩と、大力無双の大將が、いつべい張くらすると言ふので、講釋の方は越前國一條ヶ谷朝倉左衛門督義景十八人の侍大將の中に、黒坂備中守と云ふこれは私の隣國、隨筆の方は、奥州會津に諏訪越中と云ふ大力の人ありて、これは宙外さんの猪苗代から、山道三里だから面白い。

處で、此の隨筆が出處だとすると、何のために、奥州を越前へ移して、越中を備中にかへたらう、ソレ或ひは越中は禪に響いて、強力の威嚴を傷つけやうもと深慮に出たのかも計られぬ——串戲はよして、些細の事ではあるか、おなじ事でも、こゝは大力が可い、強力、と云ふと九段坂をエンヤラヤに聞こえて響が悪い。

最も隨筆の方では唯大力の人あり、としたわけを、講釋には慙うしてある。

(これは越前名代の強力、一日狩倉に出て大熊に出逢ひ、持てる鎗は熊のために喰折られ、已

む事を得ず鐵拳を上げて熊をば一拳の下に打殺しこの勇力のかくの如くであると其の熊の皮を馬標とした。)

と大看板を上げたが、最う此の邊から些と怪しく成る。此の備中、一時越前の領土巡檢の役を、主人義景より承はり、供方二十人ばかりを連れて、領分の民の狀態を察せんため、名だゝる越前の大川、足羽川のほとりにかゝる、ト長雨のあとで、水勢どう／＼として渦を巻いて流れ蛇籠も動く、とある。備中馬を立て、

「頗る水だな。」

「御意。」と一同川岸に休息する。向ふ岸へ、のそ／＼と出て来たものがあつた。

(尖へ玉のついた長杖を突き、草色、石持の衣類、小倉の帯を胸高で、身の丈六尺あまりもあらうかと云ふ、大きな盲人)——と云ふのであるが、角帯を胸高で草色の布子と来ては、六尺あまりの大きな盲人とは何うも見えぬ。宇都谷峠を、とぼ／＼と行く小按摩らしい。

(——此の按摩杖を力に、川べりの水除堤へ來ると、杖の先へ兩手をかけて、ズイと腰を伸ば

し、耳敬て、考へて居る、様子——と言ふ。

これは可い。如何にも按摩が川岸に立つて瀬をうかやうやうに見える。が、尋常の按摩と違ひがない。

上下何百文を論するのぢやない、怪力を寫す優劣を云ふのである。

出水だ危い、と人々此方の岸から呼ば、つたが、強情にもものもしないで、下駄を脱ぐと杖を通し、帯を解いて素裸で、ざぶくと涉りかける。呆れ果て、眺めて居ると、やがて浅い處で腰の邊深い處は乳の上になる、最も激流矢を流す、川の七分目へ來た處に、大巖が一つ水を堰いて龍虎を躍らす、按摩巖の前にフト留まつて、少時小首を傾けたが、すぐに禪杖をさした。手唾をかけて、ヤ、曳、と壓しはじめ、ヨイシヨ、アリヤ——とザブーンと轉がす。

備中驚き嘆じ、無事に涉り果てた按摩を、床几に近う召寄せて

「あつばれ、其の方、水にせかる、大巖を、流に逆らひ押轉ばす、凡そ如何ばかりの力があるな。」

すると按摩が我ながら我が力のほどを、自ら試みた事がないと云ふ。

「汝音にも聞きつらん、予は白山の狩倉に、大熊を撲殺した黒坂備中、此の方も未だ自分の力試さぬ。いざふれ汝と力競べをして見やうか。」

「へ、へ、へ、恐れながら御意にまかせ、早速おん對手。」と按摩が云ふ。

さて、招魂社の觀世物で、墨のなすりくらをするのではないから、盲人と相撲もいかなもの。

「シツペイの打くらをいたさうかの。」

「へ、へ、へ、おもしろうござります。」

勝つたら、御褒美に銀二枚。汝負けたなら按摩をいたせ、と此處で約束が出来て、さて、シツペイの打くらと成る。

「まづ、御前様。」

「心得た。」

「へ、へ、へ。」

と出した腕が松の樹同然、針金のやうな毛がスク〜見える。

「参るぞ。」

うん、と備中鼻臍を曳いた——とある。

「宜いか按摩。」と呼ば、つて、備中守、指のしなへでウーンと打つたが、一向に感じた様子がない、さすがに紫色に成つた手首を、按摩は擦らうとせす
「ハ、ハ、ハ、蕨が觸つた。」

は、強情不敵な奴。さて、入替つて按摩がシツペイの番と成ると、先づ以て盆の拂にありつきました、と白銀二枚頂戴の事に極めてか、つて、

「さあ、殿様お手を。」

と言ふ。其處で溢りながら備中守の差出す腕を、片手で握添へて大根おろしにズイと扱く、とえ、撲つたい處の騒ぎか、最う其だけで痺れるばかり。いや此の勢で的面にシツペイを遣ら

れた日には、熊を挫いだ腕も碎けやう。按摩爾時鼻脂で、

「はい御免。」

ト傍に控へた備中の家來、サソクに南蠻鐵の鏡を取つて、中を遮つて出した途端に、ピシリと張つた。

「アイタ、。」

と按摩さすがに怯む。備中苦笑ひをして

「力は其だけかな、さて〜思つたほどでもない。」

と負惜みを言つたもの、家來どもと顔を見合せて、舌を巻いたも道理、鏡の真中が其のシツペイのために凹んで居た——と言ふのが講釋の分である。

さて此の趣で見ると、最初から按摩の様子に、逆も南蠻鐵の鏡の面を指で張窪ますほどの力がない。激流に逆つて、大石を轉ばして人助けのためにしたと言ふのも、第一、かちわたりをすべき川でないから、石があるのが然まで諸人の難儀とも思はれぬ。往來に穴があるのとは譯

が違ふ。

處で、隨筆に書いた方は、初手から筆者の用意が深い。これは前にも一寸言つた。——（奥州相津に諏訪越中と云ふ大力の人あり、或一年春の末つ方遠乗かたぐ、白岩の塔を見物に、刺籠吹取持たせ。——で、民情視察、巡見でないのが先づ嬉しい。——（供二人三人召連れ春風と言ふ遠かけの馬に乗り、塔のあたりに至り、岩窟堂の虚空藏にて酒をのむ）——とある。古武士が野がけの風情もあり——（歸路に間川橋を通りけるに、橋姫の宮のほとりにて、丈高くしたゝかなる座頭の坊）——として、あるが、宇都谷峠とは雪泥の相違。此のいたゝかなるとばかりでも、一寸證は窪ませられる。（座頭琵琶箱を負ひて、がたり、びしりと欄干を探り居たり。——琵琶箱負ひたる丈高きしたゝかな座頭一人、人通りもなき間川の欄干を杖以てがたりびしりと探る。——其の頭上には怪しき雲のむらくとかがゝるのが自然と見える。分けて爰にがたりびしりは、文章の冴で、杖の音が凄く耳に響く、なかゝく口で言つても此の味は聲に出せぬ。

また此の様子を見ては、誰も怪ますには居られない。——（越中馬を控へ、座頭の坊何すると言ふ。座頭、聞いて、此の橋は昔聖徳太子の日本六十餘州へ百八十の橋を御掛けなされし其の内にて候よし傳へうけたまはり候、誠に候や）と言ふ。

成程それなりと言ふ。

（座頭申すやう、吾等去年、音にきゝし信濃なる彼の木曾の掛橋を通り申すに、橋杭立ち申さず谷より谷へ掛渡して鐵の鎖にて繋ぎ置き申候、其の木曾の掛橋と景色は同じ事ながら、此の橋の風景には歌よむ人もなきやらむ。木曾の橋をば西行法師の春花の盛に通ひ給ひて

生ひすがふ谷のこすゑをくもでにて

散らぬ花ふむ木曾のかけ橋

また源の頼光、中納言維仲卿の御息女を戀ひさせ給ひて

戀染し木曾路の橋も年経なば

中もや絶えて落ぞしぬめり

此のほか色々の歌も侍るよし承り候。と言ふ。——此の物語、優美の中に幻怪あり。六十餘州往來する魔物の風流思ふべく、はた是あるがために、山聳え、花深く、路幽に、水疾き風情見るが如く、且つ能樂に於ける、前シテと云ふ段取にも成る。

越中つくづく聞いて、見かけは辨慶とも云ふべき人柄なれども心だての殊勝さは、喜撰法師にも劣るまじと譽め、それより道づれして、野寺の觀音堂へ近くなりて、座頭傍の石に躓きて、うつぶしに倒れけるが——と本文にある處、講釋の即ち足羽川中流の石なのであるが、比較して言ふまでもなく、此の方が自然で、且つ變化の此の座頭だけに、觀音堂に近い處で、躓き倒れたと言へば、何となく秘密の約束があつて、ゾツとさせる。——(座頭むくと起直つて、腹を立て、道端にあつて往來の障なりと、二三十人ばかりにても、動かしがたき大石の角に手をかけ、曳やつといふて引起し、目より高くさし上げ、谷底へ投落す)——いかにも是ならば投げられる——(越中これを見て膽を消し)——とあつて

「さて、御座頭は大力かな、我も少し力あり、何と慰みながら力競べせまじきか。」と言ふ。

我も少し力ありで、やわか座頭に劣るまじい大力のほどが想はれる。自ら熊を張殺したと名乗るのと、どちらか點首かれるかは論に及ばぬ。

座頭聞いて、

「御慰みになるべくは御相手仕るべし。」

と言ふ。其處で、野寺の觀音堂の拜殿へ上り、其方盲人にて角力は成るまじ、腕おしか、頭はりくらか、此の二つの中にせむ、座頭申すは、然らばしつべい張競を仕候はんま、我天窓を御張り候へと言ふ。越中然らばうけ候へとて、座頭の天窓へ、した、かにしつべいを張る。座頭覺えず頭を縮め、面を擧め、しばし天窓を撫で、

「さて、強き御力かな、そなたは聞及びし諏訪越中な。さらば某も慮外ながら一しつべい仕らむ、うけて、御覽候へ。」

と越中が頭を撫で、見(舌赤くニヤリと笑ひ、人さし指に鼻油を引いて、しつべい張らんと齒嚙をなし立上りし面貌)——と云々、恁てこそ鬼神、勇士が力較べも壯大ならずや。

越中密に立つて燈をはづし、座頭がしつべいを燈の鼻にて受くる。座頭乗かけ聲を掛け、

「曳や。」
とはつしと張る。燈の雫子のも、のまがりめ、二ツ三ツに張碎けたり。

「あつ。」
と越中、がたと燈を投げ出し、馬にひらりと乗るより早く、一散に遁けて行く。座頭腹を立

て
「卑怯なり何處へ遁ぐる。」

と大音あげ追掛しが（忽ちに雲起り、真闇になり、大雨降出し、稻光烈しく大風吹くが如くなる音して坐頭はいづくに行きしやらむ）——と言ふのである。前の講釋と讀較べると、彼の按摩が後に侍に取立られたと云ふ話より、此天狗の化物らしい方が、却つて事實に見えるのが面白い。（「鏡花隨筆」より）

問はれぬ情（少將）

少將は鎌倉化粧坂の妓である。會我五郎時致と深く言ひ交はしたが、梶原景季も亦屢々來り遊んだ。時致復讐の前夜、別れを告げんとて少將を訪うたが、景季既に在りて相會ふの機を得なかつたので

會ふと見る夢路に止る宿もがな

つらき詞にまたも歸らん

と書き留めて歸つた。少將後ちに之れを見て深く悔い、髪を剃つて尼となつた。時に齡僅に十六歳であつた。歌に曰く

數ならぬ心の山の高ければ

奥の深きを尋ねこそすれ

捨つる身に猶ほ思ひ出となるものは

問ふに問はれぬ情なりけり

武田の末 (武野紹鷗)

武野紹鷗は和泉堺の人で、其の先は武田信光から出てゐる。武野と稱するに就て歌あり種まきて同じ武田の末なれど

荒れてぞ今は野となりける

京都に出で、珠光の門人宗陳宗悟に就て茶道を究め、終世京極黄門の詠める
見わたせば花も紅葉もなかりけり

浦の苦屋の秋の夕暮

を以て心とし、之れを數寄屋の邊壁に貼付し、以て閑寂を樂しむ、又普通國師に就て禪に參じ和歌を好みて右大臣藤原公頼に従ひ學ぶこと十四年、公頼爲めに奏請し、從五位下に叙し因幡守に任ぜられた。後ち仕を辭して堺浦に屏居し、茶を嗜みて業とし、茶家の宗匠と稱せらる。

に至つた。千利休は此人に術を受けたのである。

忠 諫 (竹腰政信)

竹腰政信は尾張中納言義直の異父兄で、成瀬隼人正正成と共に尾張家に仕へ、俱に政事を輔けた。或る時落書あり、尾張藩中に悪事を爲す者十人ありとて其九人の名を掲げてあつた、義直左右を顧みて残る一人は誰人を指すかと問うたが答ふる者がない。其時右筆持田次右衛門左右をして残る一人は君公を指すのであると告げしめた。そして義直の詰問に應じて、義直の悪事を書して上申した。義直怒りて將に之れを殺さんとした時、政信聞いて駈け付け、竊に次右衛門を己が邸に匿まつた。そして義直に申し上げた、臣近頃忠良の士を得た、希くは之れに高祿を賜り度いものだ、と。義直が其何人なるかを問へば、持田次右衛門だと云ふ。然して政信聲を勵まして曰ふ、臣不肖にして君の非を格すること能はず、深く次右衛門に慙づるの外なし、斯かる良臣を泥塗に委棄すべからずと。義直翻然として悟り、持田を召して食邑を加賜し、且

つ老職に登用した。

心の月 (手友梅)

手友梅は備中國手村玉吉城主右京亮政親の子である。天正二年十二月毛利の軍と戦ふ時友梅眼疾ありて遂に盲した。然して戦ひわれに利あらざるを知るや、竹竿を背に挿み、竿頭に闇きより闇き道にも迷はじな

心の月の曇りなければ

と書いた短冊を掲げ、其臣坂下某の肩に寄りて敵軍に入り、血戦數合花々しき戦死を遂げた。

流れ渡り (元空網)

元空網は、姓を渡邊、通稱大野屋喜三郎といひ、京橋北紺屋町の湯屋である。風流を好み、書を高谷に學んで嵩松と號したが、狂歌の戲號空網を以て知られた。妻のはるも、智慧内子と

稱して狂歌を好くした。空網老後落髮して球阿彌と號す。其時に詠んだ狂歌は

けふよりも衣はそめつ墨田川

流れ渡りに世を渡らばや

三子を試む (塚原卜傳)

無手勝流で知られた劍術の名人塚原卜傳に三人の子があつて、三人とも頗る其術に達してゐた。或る時卜傳三人の力量を試みやうと思ひ、室の入口の戸の上に、小さな枕を載せ、すこしでも觸ると直ぐ頭上に落下するやうにして置いて、さて、用に托して先づ長子と呼んだ。長子は室の入り口に來て、戸の上に危く墜ちかゝらんとして居る小枕のあるのを見、之れを取つて側に置き、室に入つてから又故の通りにして置いた。それから次子と呼ぶと、次子は戸上の枕に氣が付かずに戸を開けた。そして頭上に落ちかゝる枕を兩手に受けて、室に入り、また故の通りにして置いた。最後に末子と呼んだ。これは戸上の枕に氣が付かずにがらり戸を開けたの

で、枕が頭上に落ちかゝつた。するとひらりを身を翻して、腰の刀に手を掛けるや否や、抜く手も見せず、眞つ二つに其枕を斬つた。そして意氣揚々として室に入った。

三子坐に就くや、卜傳一刀を以て長子彦四郎に授け、お前は能く其器に任へた、と賞め、次子に對つては、一層勉強するがい、と勵まし、最後に第三子に對つて、そんなことではお前は恐らくは家名を洩すぞと、ひどく叱つた。

公然の偽筆 (二世蜀山人)

麴町飯田町中坂の茶舗龜屋の養子今井久右衛門、初代蜀山人に從つて手跡を學び又書を能くした。初め食山人と號したが、手跡は蜀山翁の骨髄を得て、よく其玉石を辨する者少かつた。當時毎月十九日杏花園の小集に、蜀山翁の書を乞ふ者多く、到底之れに應じきれない時は、久右衛門翁の傍らに在つて、公然偽筆したさうである。

文政十一年剃髮して先師の號を乞ひ受け、名弘めの書畫會を催して以來、蜀山人と呼ばるゝに至つた。

極樂へ行く (紫檀樓古喜)

紫檀樓古喜、通稱藤間古吉と云ひ、住所を定めず、羅字竹のすけ替へを以て活業とした。貧に堪へずして離別を乞うた妻に

風登り長き糸巻さて切らば

さぞや子供の泣や明さん

と書いて離縁狀の代りに出した。友人百錢猫四郎此狂歌を見て感じ、之れを藏前の富商にして風流に遊ぶ所謂十八大通の徒に訴へた。衆之れを憫み、多くの金を集めて之に贈つたので、古喜大に喜んで妻を呼び戻した。辭世に曰く

六道の辻駕籠に身はのりの道

念佛申して極樂へ行く

かはゆくもなし (現成上人)

現成上人、俗稱龜次郎、淺草花川戸町戸澤長家に住居し、船頭を渡世とした。文化十三年三月三日佃沖の汐干に雇はれて行つた時、只一人船に残つて居ると、其邊に鬻體があつたから之れを拾つて船底に入れて歸り、菩提所福嚴寺へ葬つた。それから發心して、爾來水死人見當り次第千瀧に葬つた。

文政三年三月一日剃髮してからは、好んで病人や貧民を救養した。詠に曰く

浪のうへに浮きつ沈みつする人の

ためにやぬる、我身なりけり

おのが身を見れば見る程面白し

肉毛なければかはゆくもなし

月の明りで照したい (雲井龍雄)

△赤き心

暗き夜路に櫻を白らけ

赤き心を墨で書く

花ならば春尚淺き二十七歳、咲き出づる爛漫の日も待たで、可惜生命を小塚の原の霜と消え
た雲井龍雄の心意氣は、彼が自作の此二十六文字にも掬み取れやう。名を封建回復に藉つたの
は人心收攬の策であつて、眞意の尊皇愛國に在つたことは説明する丈け野暮である。當時王政
古に復つて日向淺きに、功を誇れる薩長藩閥の徒、專恣横暴天下を我物顔に振舞ひ、徳川氏
は滅んでも、依然幕府は存するの觀があつた。権貴に阿附して一身の榮達を圖らんとする小人
輩はいざ知らず、眞に君國を愛ふる活眼骨鯁の彼龍雄、争でか此情勢を傍觀することが出来や
う。彼は奮然として起つた。

明治維新以來五十餘年の永きに亘つて、殆んど權力を獨占した薩長藩閥が、其不拔の根城を固めんとせる當初に於いて、眞つ先きに反抗の第一聲を擧げたのは、實に吾が雲井龍雄であつた。

△少年時代の逸話

龍雄は、弘化三年三月二十五日を以て米澤の城下袋町に生れた。父は中島總右衛門と言ひ、彼の實名は辰三郎と稱した。八歳にして同藩の士上泉清次郎に教を受けたが、師は此兒奇骨ありとて大に之れを愛し、且つ呼ぶに「孟嘗君」の稱を以てしたと傳へられて居る。一日塾生との間に、武士を呼ぶに「れきく」と言ふがア、いは「歴々」と書くべきか「カ々」と書くべきかといふ議論が起つた。龍雄は最も少年であつたが利かぬ氣だから黙つて居ない、それは「カ々」に違ひないと言ひ出して一步も退かぬ。而も愈々負けときまつては罰課の冷水十碗を見事に呑み干して、見る者をして手に汗を握らせた。一介の書生の身を以て、三千の同志を糾合し、第二の幕府の觀を呈したる薩長藩閥を向ふに廻はしての大芝居を演つた呑牛の氣象は、早くも此少年時

代に現はれて居るのであつた。十五歳にして藩費に入學したが、半途にして退き、爾來閉居して讀書修養に耽つた。當時米澤藩の學宗とする所朱子に在り、彼も亦初め潜心斯學を修め、殊に近思錄を愛讀したが、學進むに従ひ諸子百家の書を涉獵して遂に王陽明を信するに至つた。彼は十八歳にして同藩小島才助の養子となり小島姓を冒したが、實名よりは雲井龍雄の假名を以て世に知られた。(彼の生れたのは辰年辰日辰刻であつた。雲井龍雄の名は其處から出たのだといふ説がある。)又枕月と號し、桂香逸、遠山翠などの雅號もあつた。

△安井息軒の門に入る

慶應元年正月、龍雄は、江戸警衛の命を受けて出府し、同年七月役を畢へたが、其儘江戸に駐つて安井息軒の門に入つた。最初は養父の怒り仲々に烈しかつたが、龍雄の意志の挫け難いを知つて終に之れを許した。安井門下に在つても、彼は忽ち頭角を擡んで、僅か一年有餘にして推されて塾頭となつた。以て息軒の彼を愛し且つ信じた程も推測するに足るであらう。一日息軒龍雄に命ずるに横濱に赴いて毛布を購ひ來ることを以てした。龍雄は直ちに命を奉じ

て横濱に趣き、具さに外人の状態を視察し、毛布に代ふるに一卷の「漢譯萬國公法」を購ひ來り却つて師のお褒めに預つたことがある。當時國論開港と言ひ攘夷と言ひ、討幕と稱し、公武合體と稱して、紛々歸一する所を知らざる有様であつた。龍雄の活眼早くも海外の大勢に通ぜんとしたことは、其後藩に歸つてから藩士の質問に答へて西洋人を激賞した一事に依つても略推察することが出来る。

△風雲に乗せんとす

慶應三年龍雄藩命に依つて京都に赴き、廣く四方の士に交つて天下の形勢を窺ひ、且つ薩長土諸藩の内情を探索した。兎角する内に徳川慶喜の政權返上となり、總て伏見鳥羽の戦となり徳川征討の詔勅が下ることになつた。龍雄は事の茲に到つたのは畢竟薩藩の責任であると睨んだので、同志の士なる熊本藩の平井城之助と堅く相誓ひ、手を携へて東海道を江戸へ下つた。大井川で霖雨の爲めに川留を食ひ、旅商人に變装して官軍の目を忍び乍ら、辛くも江戸へ乗付けた頃は、各藩邸悉く引揚げてしまつて、留守居も居ないといふ有様、已むなく芝白金の興

禪寺に身を潜めて、幕府の運命を眺めて居た。然るに意外にも勝安房と西郷隆盛とが現はれて江戸城は談笑の間に授受される、一度び天を仰いで我事終ると浩嘆したが、猶大勢を挽回する策もやと、一縷の望みを奥羽諸藩の聯盟に繋いで米澤に歸つた。其途中圖らずも幕臣伊庭八郎(後年星亨を刺した伊庭想太郎の實兄)人見勝太郎(人見は寧と稱し、後に茨城縣令などを勤めた人で、谷中の墓地に建てられてある龍雄の碑文は、此人の撰に係るものである)等の一行に遇つた。龍雄は單身營中の人見を訪うて素志を告げ、大に意氣投合して互に血盟を交はしたのであつた。

△策用ゐられず

龍雄が米澤に看いたのは明治元年の六月七日で、米澤の兵は既に越後路に出で、會津藩と相應じて盛んに對抗して居た。供つて龍雄も直ちに其後を追うて越後に赴き、甘粕備後守に會つて薩長離間の策を説いたが用ゐられなかつた。で、長藩の士時山直八と相識の間なるを幸ひとし、時山に向つて盛んに薩閥の非違を算へ、「討薩檄」を認めて各藩に散布した。又會津へ廻つ

て松平容保にも、戦略上の献策をしたが、之れも用ゆる所とならなかつた。依つて愈々意を決して各藩を遊説すること、したが、出發に臨んで滯在中知已になつた會津藩の側用人原直鐵が、志を告げ血を嘔つて盟約を結び、且つ幕臣羽倉綱三郎(林鶴梁の第二子)及び日光の櫻正坊の二人を紹介して同盟に加へた。そこで此一行四人は、打揃うて各藩遊説の途に上つたが途中磐城に於て圖らずも人見勝太郎に邂逅し、相抱いて其奇遇を歡ひ、夜を徹して談笑した。其夜龍雄に左の如き即吟の詩がある。

平方灣勿來關。石路素廻巖洞間。怒濤如雷噴雪起。洶去洶來海嘯山。地形雄偉冠東奥。一礮守レ此誰能攀。君航東洋來此地。目擊區處防海事。雖奈秦兵威不レ振。風聲鶴唳肝膽墜。君尙叱咤突賊陣。指揮死士彈且刺。彼衆我寡勢不レ便。咽喉之地忽然棄。君不レ見大梁舉レ兵救レ趙來。函谷之關可擊摧。縱令此地棄不レ守。雪恥有期君休レ哀。我亦潛行徇兩毛。襲レ都將刺二姦魁。義兵一時起賊背。掩擊殲之亦快哉。勝算歷歷在方寸。我任此事不レ敢遜。今日別君君自愛。唯須三詩酒遣宿悶。金風嫋々吹晝水。三十六峰秋色美。此時與君

笑相迎。遊遊好携東山妓。

併し五人は終にまた復び相會するの機を得なかつた。

△彼の見た薩藩

龍雄が各藩に散布し、且つ其寫しを知人なる長藩の部將時山直八に送つて、薩長聯盟の永續せざる所以を書添へたといふ「討薩檄」は左の通りである(後年時の總理大臣原敬を東京驛頭に刺殺した少年中岡某は、伊藤痴遊著「明治裏面史」を愛讀し殊に書中に收められた此討薩檄を讀んで感奮したことを自ら法廷に於て告白した)。

討 薩 檄

初め薩賊の幕府と相軋るや、頻に外國と和親開市するを以て其罪とし、己れは専ら尊王攘夷の説を主張し、遂に之を假りて天眷を僥倖す。天幕の間、之れが爲に紛紜内訌、列藩動搖、兵亂相踵ぐ、然るに己れ朝政を專斷するを得るに及んで、飄然局を變じ、百方外國に諂媚し遂に英佛の公使をして、紫宸に參朝せしむるに至る。先日は公使の江戸に入るを譏りて幕府

の大罪とし、今日は公使の禁闕に上るを悦んで盛典とす。何ぞ夫れ前後相反するや、因是觀之、其十有餘年尊王攘夷を主張せし衷情は、唯幕府を傾け、邪謀を濟さんと欲するに在ること昭々可知。薩賊多年、謫詐萬端、上は天幕を暴蔑し、下は列侯を欺罔し、内は百姓の怨嗟を致し、外は萬國の笑侮を取る、其罪何ぞ問はざるを得んや。

皇朝陵夷極まるといへども、其制度典章、斐然として是れ備はる、古今の沿革ありといへども、其損益する所可知也。然るを薩賊専權以來、濫に大活眼大活法と稱して、列聖の徽猷嘉謀を任意廢絶し、朝變夕革、遂に皇國の制度文章をして、蕩然地を拂ふに至らしむ、其罪何ぞ問はざるを得んや。薩賊擅に攝家華族を擯斥し、皇子公卿を奴僕視し、猥に諸州群不逞の徒、己れに阿附する者ヲ拔て、是をして青を紆ひ紫を拖かしむ、綱紀錯亂、下凌ぎ上替る、今日より甚しきは無し、其罪何ぞ問はざるを得んや。伏水の事、元暗昧、私闘と公戰と就直就曲とを不可辨、苟も王者の師を興さんと欲せば、須らく天下と共に其公論を定め、罪案已に決して然る後、徐に之を討すべし、然るを倉卒の際、俄に錦旗を動かして、遂

に幕府を朝敵に陥れ、列藩を劫迫して、征東の兵を調發す、是王命を矯めて、私怨を報ずる所以の姦謀なり、其罪何ぞ問はざるを得んや。

薩賊の兵、東下以來、所過の地侵掠せざるごとく、所見の財、剽竊せざるごとく、或は人の雞牛を攘み、或は人の婦女を淫し、發掘殺戮、殘酷極る、其醜穢、狗鼠も其餘を不食、猶且靦然として、官軍の名號を假り、太政官の規則と稱す、是今上陛下をして、桀紂の名を負はしむる也、其罪何ぞ問はざるを得んや。

井伊、藤堂、榊原、本多等は、徳川氏の勳臣なり、臣をして其君を伐しむ、尾張、越前は徳川氏の親族なり、族をして其宗を伐しむ、因州は前内府の兄なり、兄をして其弟を伐しむ、備前は前内府の弟なり、弟をして其兄を伐しむ、小笠原佐渡守は壹岐守の父なり、父をして其子を伐しむ、猶且強て名義を飾て曰、普天之下莫非王土、率土之濱莫非王臣、嗚呼薩賊五倫を滅し、三綱を斲り、今上陛下の初政をして、保平の板蕩に超えしむ、其罪何ぞ問はざるを得んや。

右の諸件に因て見之ば、薩賊の所爲、幼帝を劫制して其邪々濟し、以て天下を欺くは、莽操卓錫に勝り、貪殘無厭、所至殘暴を極るは、黃巾赤眉に過ぎ、天倫を破壊し、舊章を滅絶するは、秦政宋偃に超ゆ、我列藩之を坐視するに不忍、再三再四京師に上奏して、萬民愁苦列藩誣冤せらる、狀を曲陳すといへども、雲霧擁蔽、遂に天闕に達するに由なし、若し唾手以て之を誅劔せずんば、天下何に由てか再び青天白日を見ることを得んや。於是敢て成敗利鈍を不問、奮て此義舉を唱ふ、凡四方の諸藩貫日の忠回天の誠を同うする者あらば、庶幾くば我列藩の不逮を助け、皇國の爲に共に誓て此賊を屠り、以て既に滅するの五倫を興し、既に破る、の三綱を振ひ、上は汚朝を一洗し、下は頽俗を一新し、内は百姓の塗炭を救ひ、外は萬國の笑侮を絶ち、以て列聖在天の靈を慰め奉るべし、若尙賊の籠絡中に在て、名分大義を不能辨、或は首鼠の兩端を抱き、或は助奸黨邪の徒あるに於ては、軍有ニ定律、不敢赦、凡天下の諸藩幾くは勇斷する所を知るべし。

△歌吹海中閑讀書

龍雄が常野の各地を出没して居る間に、奥羽各藩の聯盟も崩れ、幾度か難を冒して會津に歸つて見ると、會津の籠城戦も危機に迫つて居た。龍雄は直ちに米澤に駆け付け、藩主を説伏して會津藩を援ける計畫であつたが、米澤に歸つて見れば、上杉家は既に官軍に降参した後であつた。而も降参と同時に、領土奉還の議を決して官軍へ申込むといふ内相談があつたから、龍雄は藩の重役間を説いて反対意見を披瀝した。其熱誠に動かされて更に藩主から龍雄に意見を徴されたので、直ちに長文を綴つて胸中を吐露したが、藩議はいつの間にか奉還の事に決して又如何ともすることが出来なかつた。龍雄の悲憤憂悶知るべしである。併し藩でも龍雄の非凡な人物なことは知つて居たから、藩費興讓館の講師に推すこととなり、彼も暫く羽翼を收めて郷黨の子弟教養に盡して居た。兎角する内に明治二年の春となり、復び上京の機を得、雀躍して郷里を出た。藩の用人森三郎の世話で、數寄屋橋外の船宿稻屋に出入して天下の形勢を窺ひ、旁々同志の糾合を謀つたのは其頃のことである。詩あり曰く

撲面紅塵豈洗予。人間到處有嵩廬。

誰知孤劍青衿子。歌吹海中閑讀書。
與俗浮沈碎又醒。我心如水跡如萍。
閑々更以掣鯨手。挿出寒梅花一餅。

△歸順部曲點檢所

稻屋は幹部の密議の場所として、他の大勢の同志は芝二本榎の上、行寺と圓眞寺とに屯集することにし、政府の目を晦ます爲めに「歸順部曲點檢所」といふ看板を掲げ、専ら脱兵を鎮撫すると稱して居た。ところが時代が時代であるから、各藩の浪士などが續々集まり、多くの者の中には随分如何はしい者も混つて来る。龍雄が是等の人々を如何に嚴格に取締つたかといふことは、武人にあるまじき振舞をした同盟の一人が、龍雄の詰責に遇つて切腹したといふ事實に依つても知ることが出来やう。而も亦一方には斯く多勢の人々の衣食の資を作る爲めに、彼は寢食を廢して狂奔せねばならなかつた。當時彼自ら其苦衷を慰めて吟じて曰く

殺氣襲人難自持。不堪能與世推移。

腰間寶刀長三尺。乞食俟門此一時。

寺院屯集中の規約は實に左の通りである。

一、門内酒肉を入るゝを不許

但藝術賣買之者同斷

一、酉刻後門外に出るを不許

但無止用筋有之節は士官之内一僕召連合印の提灯を爲持可致歩行候事

一、月々五六の日應對所に於て開宴し其外飲酒を不許

但五の日は上行寺六の日は圓眞寺

一、朝飯は汁、晝夕は一菜たるべし

但香の物は此限にあらす

一、五六の日宴席の肴は一種に可限事

但野菜香の物は此限にあらす

一、兵士以上三人に一刀一袴一羽織を見積り臨時居残る者は外出之者へ相譲り、融通相用可申事

一、宴席に他人を雜ゆるを不許婦女子は勿論之事

一、小歌、拳等、すべて鄙劣の作行を不許、五六の宴席と雖も同断之事

一、平日の來客は其人により、賄方手限り其宅に於て爲取扱可申候、尤其毎度割符を認め賄方へ差送、兩寺の内より順番に相伴人差添へ可遣事

但公用筋の應對有之應對所取開候、節は此限にあらず

一、應對所五六の外、切たるべし

但公用應對之節は格別の事

一、入湯は兩寺隔日たるべし

一、神社佛閣を始男女群集の場へ立寄るを不許

一、猥に他人と親むを不許

一、今般敷願の首尾、彌御聞濟に可相成哉否も知るべからざる此際に付一統重く謹慎可罷在

は申迄も無之候、萬一上は朝廷の御法を犯し下は同盟の申定を破り外は世上の侮を取り内

は營中の争ひを起す者等有之に至ては小事を以て大願を妨ぐるに至る哉も測がたき儀に候

即時嚴重處置可致候且又今日の衣食住は皆他力の方便を以て營み居候此際に付平生實儉を

守るべきは勿論之事に候へ共歎願の趣、未だ御聞濟にも不相成、各生死の程も測り難し

と日夜心を痛め居る此節に候間、たまにはうさはらしも無止事に付其爲め一月三度つ、取

開き候宴席に候條世の常に氣樂なる人の如く醉飽を恣にする事は夢々有此べからざる事

△天門之窄窄於瓊

當時の政府は只管民心を收攬せんとして、後年の衆議院の前身とも言ふべき集議院を設け、各藩の士族より貢士を集めて、公議輿論に依つて政治を行ふの形を示した。集議院の幹事に稻津涉といふ人があつて、能く龍雄の爲人を知り、如何にもして其不平を忘れしめて新政府の下に充分に驥足を伸ばさしめ度いものと思ひ、龍雄を呼んで懇談の結果此れを集議院の寄宿生と

することゝした。然るに此處にも勢力を振つて居た薩長の士族は、龍雄が嚮きに討薩檄を飛ばし、或は薩長離間の策を講じたことを知つて度るので、熾んに此れを排斥した。折角收まりかけた龍雄の不平は茲に於てか再び勃然として起らざるを得なくなつた。即ち集議院の壁に左の詩を大書して懸然其處を去つてしまつた。

天門之窄窄於瓊。不容封鉤一管仲。

踏蹬無恙舊鱗鱗。生還江湖眞一夢。

自笑豪氣猶未摧。每經一艱一倍來。

睥睨蜻蜒洲首尾。將向何處試我才。

溝壑平生決此志。命乖道窮何足異。

唯須痛飲醉自寬。埋骨之山到處翠。

又

生不聊生死不死。呻吟聲裡仆又起。

立馬湖山彼一時。雄飛壯圖長已矣。

我生有涯愁無涯。悠悠前途果如何。

咄々休說斷腸事。滿江風雨波生花。

△決死連判三千名

龍雄の不平は將に勃發せんとした。五十名の幹部三千名の同盟連判者、此れ丈の者が決死の活動を始むれば、まだ基礎の確立せぬ藩閥政府を顛覆して、新政府を樹立すること必ずしも至難でないと思つた。左に同志間に交はされた誓詞を掲げる。

第一誓詞

回瀾の策、曾て拮据すと雖も、名なく、策なく、又義なく、一敗地に塗る、此是我不足爲無庸才、然らしむる處也、君等尙且我を唾棄せず、生死長く我を左右す、我實に惶、實に懼、雖、然諾を重んじ、刀鋸を輕んずは、我素より志あり、我何ぞ自今徒に優遊以て遂に此世を翫ふを得んや、因て改て所ニ相盟、左の如し。

一、朝廷に對し不可逃の名分を不可犯し事

一、地方分與人殊趨向と雖も、若し我活眼を一刮して以て傲睨せば、則何物が我八州中の生靈ならざらん。今や清韓之國是、往々將に攘夷に決せんとするの時、神州他日の變動瞭々として之を掌に指すが如し。強ら薩を怨み、長を怒り、兄弟鬩牆の謗りを取ることを勿れ。

一、大に有爲を欲する者は、大に所忍なかるべからず、目前の小恥に作色して、撫劍疾視すること勿れ。

一、我將に朝廷の爲めに目前の小實効を奏し、以て在廷縉紳をして、其猜疑の心を氷解せしめ、然後、勇退遠遊、清に航し、歐に轉じ、文明諸邦多少之英傑に交を遍くし、以て大に我規模を弘め、大に我が才略を益し、以て君等の望む所に可憚得の大器となり、然る後回帆將に初めて共に大に經營する所あらんとす、君等若し實に我を愛せば、目前の小利害に區々として、我肘を掣し、我臂を紵し、以て遂に我大謀を誤ること勿れ、右天地に誓て所自勵の赤心を布く者也、仍て如件

第二誓詞

會稽之恥を雪ぎて以て臣子の大節こゝに盡きたりと爲す者、古の時に在ては、則喚で忠臣と爲すを得も、然も今の世に在ては、則喚で亂臣と爲すを不免、如何となれば、則神州今日之勢、外洋諸夷、我が四陲を伺ひ、神州岌々、安危實に知るべからず、夫れ輕重固と權を殊にし、先後不同叙、今の時に當りて、獨り一君之宿怨を報ひ、一藩の舊恥を雪がんと欲し、内訌私闘、肯て神州の安危を顧みざる者は、亂民に非ずして何ぞや、然らば則、今日我黨立志の方豈審擇する所なかるべけんや。僕年少力微なりと雖も、庶幾くは諸盟長足下と同じく相切し相磋し、以て大に我が規模を弘め、大に我が舊習を洗ひ、古今時勢の同じからざるを察し、大小事體の固と殊なるを辨へ、内は我が大廷の綱紀を壞らす、外は彼の諸洋の笑侮を來さず、前は前鼻を滌ぎ、彼は香芳を遺し、生ては神州干城の士と爲り、死しては神州忠義の鬼と爲り得べきの處へ着眼し、以て大に鞠躬盡力せん、自分以後、同盟の兄弟所統の士卒と雖も、敢て此誓詞に背く者あらば、直に相屠りて可然者也、仍如件

明治三年三月

他隊首長

雲井龍雄

△陰謀遂に露はる

政府が龍雄の動靜に監視を懈らなかつた所へ、數多い同志の中には、意志の堅固でない者があつて、陰謀は遂に露はれ、龍雄は米澤藩へお預けの身となつた。龍雄が二本榎から引揚げられて、米澤藩邸の一室に押込められたことを聞いた同志は、直ちに同邸に押寄せて嚴重の談判を試み、事誼に依つては一騷動持上り兼ねまじき有様であつたが、龍雄は此時既に命運の已れに非なるを悟つたであらう、同志を宥めて事無く引返へさしめた。そして一度米澤に檻送され復び江戸に護送されんとした際には、宿痾の肺患が可なり重體になつて居た。で、親友等が一時身を潜めて身體を養ふことを勸告したが、主家に累を及ぼすのは忍びないと言つて、潔く上京した。而も出發に先立つて、一切の關係書類を燒棄して了つた。東京へ着いたのは明治三年の八月十四日、其筋の下調を受けると直ぐに傳馬町の牢屋に送られ、其處で激しい拷問を受け

たが、同盟の名は緘黙して終に言はなかつた。愈々處刑の決定つたのは同年十二月廿八日、傳馬町の牢屋に於て、斬罪に處せられ、其首は小塚原の刑場に曝された。龍雄と共に死罪に處せられたのは原直鐵等九名、流刑に處せられた者は五十八名であつた。

△潔かりし彼の最後

彼は刑場に臨むや、神色自若として毫も平生に異ならず、左右を睥睨して曰く「あ、余が策をして成らしめば政體更むべく奸臣斬るべく幕府の冤雪ぐべく藩祖の業興すべし。而も今や萬事休矣、天なる哉」と。當時君を斬りたる首斬朝右衛門といふ者の實話として左の如く傳へられて居る。

手前が十七歳の時です。明治三年庚午歲師走の二十八日、江戸市中の節季で、貨餅が盛んに搗かれ、藥研堀の年の市といふに、今日は米澤の藩士雲井龍雄を斬れといふので、小傳馬町の囚獄へ参りましたが、音に響いた浪士でありますし、斬損つたとあつては大變だと、おのづとあたり前の囚徒を斬るのは自分の覺悟も違つて居ました。申す迄もありませんが、安

井息軒門下で、一夜に左氏傳を読み終つたと云ふ英雄。時に利あらず囚はれの身となつて、その春に米澤に押送されまして、八月に江戸へ檻送されました。御取調べも嚴重で、同志の面々を白状させようとしたが、幾ら拷問に逢つても一向屈服しない。當時の事ですから芝居で演るやうな残酷な目に逢はしたでせうが、連判帳は焼棄してあるから、一死國に殉ずといつて平氣であつた。雲井氏は至つて小柄で、大膽などは何處に宿つてゐるか分らぬ男でした。この人物が雲井龍雄といつて、兎に角天下に名を轟かした人かと呆れた位でありました。今や刑場の露、刃の霜と消える刹那に神色自若として控へて居た有様は、今に敬服の外ありません。

.....
彼が一託を重んで同志羽倉綱三郎の遺孤を濟うたことや、船宿稻屋の災禍を救うたことなど彼の爲めに傳ふべき美談は頗る多いが、與へられたる紙数は既に盡きて居るから、夫れは又の機會を譲とることし、最後に彼の吟作に斯かる端唄一首を掲げて筆を擱くことにしよう。

雪と梅、雪が薫るか薫るは梅か、迷ひますのは君ゆるに、くらむ心は眞のやみ、月のあかり、
で照らしたい。(田端隠士)

假りの契をいかで結ばん (楠正行)

楠正行嘗て吉野に朝する途中、出遇うた輿の中から婦人の泣聲の洩るゝを聞き沓め、此れを糾問すると、高師直が、欺いて宮女辨内侍を誘ひ出す途中であることが判つたので、劍を抜いて其徒を逐ひ、内侍を送り届けて、其次第を以聞した。帝大に此れを嘉みし給ひ、内侍を正行に賜はらんとしたが、正行は

とても世にながらふべくもあらぬ身の

假りの契をいかで結ばん

と詠じて固辭し、其後間もなく四條畷の戦に討死を遂げた。

蟻とほし (紀貫之)

紀貫之嘗て紀伊に赴き、夜和泉を過ぎようとする、その騎つた馬が地にひれ伏して動かさない。不思議に思つてゐると、土地の人が貫之に告げて曰ふには、此地に靈蟻あり、今禮無くして過ぎようとした爲めに、その怒りに觸れたのではなからうか、と、貫之大に驚いて馬より下り、嗽ひして和歌を詠じて謝した。歌に曰く

かき曇り黑白も知らぬ大空に

ありと星をば思ふべしやは

と、馬即ち進んだ。

味噌を着に (北條時頼)

或る夜北條時頼が、平宣時を其邸に招いたことがある。宣時も随分貧乏をしてゐたと見え

て、直垂の用意がなくて困つてゐると、又使ひが来て、「直垂でもなくて困つてゐるのではないが、夜分のことだ、構はないから早くまゐるが、い。」とのことに、宣時着古した鞆だらけの直垂を着けて急いで伺ふと、時頼大に歡び迎へて手づから銚子に土器を取りそへて持ち出し、「何か肴を。」と言ひながら、紙燭して人の寢靜まつた臺所をあさり、膳棚に味噌の残つた小皿を見出だし、それを肴に飲みかはして政談に夜の更くるを忘れたといふ。時頼は其時實に堂々たる天下の執權職だつたのである。

岩田おび (木山紹宅)

木山紹宅、名は惟久、左近大夫と稱し、肥後木山の城主、入道して紹宅と號した。嘗て京師に入るや、會々紹巴聯歌會を北野に催すと聞き、乃ち之れに赴いた。そして紹巴がまた七度の別れをぞする
と咏むと、紹宅之れに